

ネプ子さんが別次元に
ログインしました

無言の短パン

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

なんか…ネプテューヌの二次創作って…ねぶねぶが主人公の作品…少なくとも。

そんなでもって、超次元ゲームのねぶねぶがPPとかUとかのスピノフの作品に飛ばされる話があったら面白くね。

という軽い気持ちから出来た作品です。

ねぶねぶはVⅡ後のねぶねぶです。

基本1話完結です。

目次

ネプ子さんが夢の合体スペシャル次元にログインしました。	2
ネプ子さんがネプU次元にログインしました。	10
ネプ子さんが激ノワ次元にログインしました。	19
ネプ子さんがPP次元にログインしました。	29
ネプ子さんが激ブラ次元にログインしました。	40
ネプ子さんが四女神オンライン次元にログインしました。	50
ネプ子さんが支配エンド次元にログインしました。	58
ネプ子さんがアニメ次元にログインしました。	68
ネプ子さんが初代ネプテューヌ次元にログインしました。	77
ネプ子さんが聖剣エンド次元にログインしました。	87
ネプ子さんがリバー1次元にログインしました。	96
番外編	
ネプ子さんが番外編次元にログインしました。	

ました。	105
ネプ子さんが番外編次元にログインしました2	113
ネプ子さんがNGシーン次元にログインしました。	125
劇場版ネプテューヌ予告	137
劇場版ネプテューヌ予告2	145
劇場版ネプテューヌ 予告3	153
ネプ子さんが裏話次元にログインしました。	159

ネプ子さんが夢の合体スペシャル次元にログインしました。

私の名前はネプテューヌ。

ゲームギョウ界にある4つの大陸の内の1つである、プラネテューヌの女神様なんだよ。

そして、何と言つてもこの作品の主人公！主人公オブ主人公とは、私のことだよ！
今まで、沢山の仲間たちと一緒に、数えきれないくらいの大冒険をしてきたんだよ。

「…そんな私ですが…目が覚めたら、見知らぬ場所に居ました」

「…うーん。今までいろいろなトラブルに巻き込まれて来たけど。こんな体験は始めてだよー」

「はっ、まさかこれは…今流行りの異世界召喚つてヤツ！…ということとは…私にも特典とかチート能力とかが備わったはず！」

「いける…今こそ！ゲーム内では馬鹿にされ続け、現実ではスペックがどんどん弱体化され続けたネプ子さんの本気を見せる時だよ！」

「今の私なら、ボールやロムちゃんラムちゃんなんて目じやないよ！」

「初代ネプ子さんなんて目じゃないぐらいのネプテューンプレイクを見せてあげるよ！
ふはははー！」

……ステータス確認後……

「うー、チート能力なんてこれっぽっちも備わってなかったよ。…また私にかしちや
いましたかーとか、これは初級魔法だぜとか言ってみたかったなー」

「うーん、困ったなー。私これから、どうすればいいんだろー」

どうすることも出来ず途方に暮れていると、近くからエンジン音が響いた。

「おー、あれはバイクだ。…うげえ。カラーリングがナスの色だ！なにあれ、趣味悪い
なー」

説明しよう、私はナスが大っ嫌いなのである。

あんなもの、人が食べるものじゃないよ。あの名人だつてナスには勝てないんだか
ら。

あつちなみに、好きなものはどこかのまると同じプリンだよ。

「…こんな時は、周りの人に聞いて回るのが物語の基本だよ。おーい、そのバイクに
乗ってる人ー！止まってー！」

「今の声、まさか」

バイクは止まってくれた。

そしてバイクから2人の女の子が降りてきた。

その内の一人が私のよく知る人物だった。

「まさか…あいちちゃん！あいちちゃんだー！」

「やつぱり、あんたネプ子じゃない！こんなところで何やってんのよ」

「おー、やつぱりあいちちゃんだ！いやー、見ず知らずの場所でききなり知り合いに会える

なんて。さすが私！主人公の鏡だね」

「君はその姿でも、相変わらず馬鹿丸出しだね」

「ねぷ！初対面なのに凄く馬鹿にされた！酷いよー」

「はあ、初対面。なに言ってるの。あれだけ迷惑かけたのに。元々ポンコツだった頭が

さらにおかしくなったの？」

「いやほんとほんと。赤髪ポニーの子なら知り合いがいるけど、水色ポニーの君の事は

知らないよー」

「せがみん。多分その私ませがみんなが知ってる私じゃないんじゃないかな」

「なん…だ…と…」

あ…ありのまま今起こった事を話すぜ！

悪趣味な色をしたバイクだと思つてたら、そのバイクがいきなり私の声で喋り出したんだ。

な…何を言っているのかわからねーと思うが、私も何を言ってるのいるのかわからない。

頭がどうにかなりそうだった…。

イケボで喋る真顔の魚だとか、喋るオカマのロボットだとかそんなチャチなもんじゃあ断じてねえ。

もっと恐ろしいものの片鱗を味わったぜ…。

いやまあ、今上げた1匹と1機も全然チャチじゃあないんだけどね。

「ね。ぶーなんでそのバイクから私の声が。…はっ！あいちやんまさか！…そこまで私のことを…もー、ダメだよ。気持ちはずっとも嬉しいけど、私たち女の子同士だよ」

「おー、よく分かったね。さすが私。…点検の時には私になにもできないのいいことに、とても口に出しては言えない、あーんなことやこーんなことを…」

「2人して変なこと言ってるんじゃないわよ！」

「あいた！」

「もー、ぶつことないでしょー」

「ぶざけたあんた達が悪いんでしょー！」

「えーと…本当に私のこと、知らないの」

「だからー、さつきからそう言ってるじゃん。疑り深いなー」

「そ、そうだったんだ。…その…ごめん。しつこく聞いて」

「いいよー、分かってくれば。えーと、キミは私の事を知ってるみたいだけど、私はキミのことを知らないからー。できれば、キミの名前を教えて欲しいなー」

「そうだね。…私はセガミ。よろしく」

「おー。それなら、せがみんだねー。よろしくー」

「ねえ、ネプ子。貴方は私知ってるネプ子なのよね」

「なに言ってるの。私は私、プラネテューヌの女神、ネプテューヌだよ」

「プラネテューヌ？ いったい何処のことを言ってるのかしら？」

「なん…だと。…もー、冗談はよしてよー。プラネテューヌって言ったらゲームギョウ界にある4大陸の1つでしょ」

「ゲームギョウ界？…あんた、いったい何をいつてるの？」

「…あー、これはもしかしなくても。そういうことなのかなー」

「あれ、どうかした？」

「…そっかー、ここは私知ってる世界とは違う別次元かー。…いやー、こう何度も別次元に飛ばされると、流石に慣れるものだねー」。

「急に一人でぶつぶつなにを言ってるの？」

「えーとね、簡単に説明すると」

……説明中……

「この世界とは違う別次元から来たねえ」

「…にわかには信じられないけど…神様もいるし、過去に行けたり過去が消滅することもあったし。別次元があってもおかしくはないわね」

「わ、私は完全には信じてないからね！君みたいなのが収めてる国とか想像できないし」「酷いなー、せがみん。私が収めてる国なんて、絶対にいい国に決まってるじゃん」

「…ねえ、あいちゃん。今さらだけど、なんでそのバイクから私の声が聞こえるの？」

「ああ、この世界のこととはまだ話してなかったわね。実は…」

……説明中……

「女神とセハガールの争いを止めて、歴史を喰らうものとの戦いねー。この世界も大変だったんだねー」

「そうだよー。歴史の消滅とかで何度もピンチになって…その度に私が大活躍して危機を乗り越えてたんだよ」

「ちよつと！勝手に捏造しないでよ。私の活躍で歴史を喰らうものを倒したんだからね」

「えー、せがみん最初の頃は、すごーく足を引つ張ってた気がするんだけど」

「そうね、凄い頑固で私の話なんて全く聞かなくて。…まあ、結局それが正しかったから、あまり非難はできないんだけどね」

「そうだよ、私はなにも間違ったこと言っただけだよ」

「うーん、せっかく別次元に来たんだし。セハガールで子たちやこっちの世界のネプギアたちに会ってみたくないなー」

「なに呑気なこと言ってるの。いきなり別次元に連れてこられて、元の世界に帰れる保障もないんだよ」

「心配してくれるの。…せがみん意外と、優しいんだねー」

「意外とって何よ！意外とって！私は別に君がどうなるうと気にしないんだからね！」

「はいはい、ツンデレ乙。…そういえば…せがみんって、一応この世界の神様なんだよね」

「一応じゃなくて、正真正銘、神様だよ！」

「だったらさー」

「ネプ子が2人にセガミも。∴はあ、これからしばらくの間、かなーり疲れる旅になりそうね」

「ねえ、せがみーん。せがみんはこの世界の神様なんですよ。何とかして私を元の次元に返してよー」

「そーだそーだ！神様だったら何とかしろー」

「無茶言わないでよ。別次元がある事なんて今まで知りもしなかったんだから。そもそも、君たちも女神だよね」

「∴まあ、しようがないか。それに∴こんな旅も悪くないかな」

この後いろいろあつて、あいちゃんたちと旅を共にすることになった。

旅の最中、過去の世界に行つてこつちの世界の女神達や、セハガールに会うことになるとは、この時の私は思いもしていなかった。

続かない。

ネプ子さんがネプU次元にログインしました。

「やつほー。みんなの主人公…ネプテューヌだよー」

「えー、突然ですが。…目が覚めたら知ら…なくはない場所。バーチャフォレストにいました」

「いやー、驚いたよ。…なーんか寝苦しくて目を覚ましてみると、森の中で。大量のスライムにおしくらまんじゅうにされてたからね」

「武器が無かったから、32式エクスブレイドで一網打尽にしたけど。…なんでこんなところにいるのかさっぱりだよー」

「…うーん、思い当たる事といえば…ここ最近の仕事サボりまくってぐーたらしてた事かな。…いーすん、怒っちゃったのかな?」

「もしそうだとしたら…酷いよ。私がぐーたらしたり、サボったりするのなんていつもの事なのに!」

「…まあ、何はともあれ。ここにいても何もわからないし…プラネテューヌ教会に帰ろうかな」

「うーん、でもなー。…もし本当にいーすんが原因で、まだ怒ってたら…ネプギアかコン

「パに助けてもーらおつと」

……移動中……

「えー、私、ネプテューヌは無事にプラネテューヌに帰還しました。…ですが、なーんか国の雰囲気違います」

「うーん。うまくは言えないんだけど。…有名なモンスターをゲットして育成するゲームの初代唯一のシャドーモンスター系統の色違い的な？」

「一見同じに見えるんだけど、人や建物がびみよーに違うんだよねー」

「なんだろうなー、このモヤモヤした感じは？」

「おやおや、ネプテューヌさんではないですか」

「こんなところで会うなんて偶然だね」

謎の感覚にモヤモヤしているネプテューヌに2人の少女が話しかけて来た。

「おー、君達は…確か…デングキコちゃんと…ファミ通ちゃん…だっけ？」

「あれれー、私達のこと忘れちゃったのかな」

「酷いですねー。共にゲームギョウ界を救った仲だというのに！」

「おかしいな、ついこの間も取材したばかりなのに」

「そうだっけ?…あれれー、君達と一緒に冒険した記憶も、最近取材を受けた記憶もないんだけどなー」

「おやおや?まさかネプテューヌさん、あの時のことを忘れちゃったのかな?」

「そんな馬鹿な!…そうだ!ちようどここに、あの時の活躍を私達でまとめた記事があります。…この記事を見て思い出してください!」

デングキコちゃんは1冊の雑誌を私に突き出して来た。

2人の剣幕に押され、雑誌を読み進めた。

……確認中……

この雑誌を読んでみたんだけど……取り敢えず…ブランちゃんで大爆笑しちゃった。

だってあのブランが「いつもニコニコ」とか、「わたし、がんばります♡」

とか言ってるのを想像したらもう、笑いが止まらなかつたよ。

でも、こんな面白いブランも、私の記憶にはないんだよね。

…かわいさを売りにしたブランちゃんを、私が忘れるはずがないよ。

ということは…

「おいおい、これはもしかするともしかするぜ。…まさか…また私…別次元に来ちまったのか」

「別次元、はて？」

「頭が混乱してるのかな？」

「…うわー、どーしよー！前回はネプギアやコンパにもすごーく心配かけたのにー！」
説明しよう。私はつい最近まで、こことは違う別次元に飛ばされていたのである。

そこではバイクの私やあいちゃんそしてせがみんの3人と一機で、大冒険をしたんだよ。

最終的には、セハガールの4人や3人目の私、ぶるるん、ネプギア、うずめの合計1人と一機で、歴史を喰らうものの親戚さんらしい、次元を喰らうものとかいうのと死闘を繰り広げたんだよ。

最後は女神になったせがみん、爆炎覚醒状態のあいちゃん、そしてネクスト・フォームになった私の3人同時攻撃で倒すことができたんだよ。

「ネプテューヌさん？突然大声を出して、どうしたのかな？」

「前はちっちゃいいーすんがいたから私の世界と連絡は取れだけど…この世界にいーすんがいなかったらどうしよー！」

「今日のネプテューヌさんは、いつにも増して変ですね。…本当に何があったのですか

？」

「まあ、きつと何とかなるか！なんてたつて、私、主人公だし！」

「…ぼかーん…」

「あつ、君達まだいたんだ。…そうだ、さっきの記事を見せてくれたお礼に、君達には私
が何者なのか教えてあげるよ。…いや、実はねー……」

……説明中……

「なんと！では貴方は、この世界とは違う別世界から来たネプテューヌさんということ
ですか」

「うーん、にわかには信じられないね」

「そうだよね。いきなりこんなこと話しても…直ぐには信じられないよね」

「いいえ私は信じますよ！ネプテューヌさんが嘘を言ってるようには見えません」

「同感だね。それにネプテューヌさんなら別世界に行けたとしても、なんらおかしくは
ないかな」

「そんなにあつさり信じちゃつていいの！こんな、すごーく胡散臭い話！」

「悔らないでください。それでも私たちはゲーム記者ですよ」

「うん。相手が本当か嘘を話してるのかくらいの見分けはつけられるよ」

「もつとも…ネプテューヌさんがわかりやすい性格だという点もあげられますが」

「君達、なかなか見どころがあるね。…元の世界だとあんまり接点がなかったんだけど、私と仲良くしてくれると嬉しいよ。これからよろしくね、デンゲキコちゃんにファミ通ちゃん」

「いえいえ、こちらこそよろしくおねがいます」

「よろしくね、別次元のネプテューヌさん」

……Now Loading……

「いやー、別次元に来ていきなり知り合いを2人も増やすなんて、さすが私！主人公の鏡だね。…こんなのノワールじゃあ、絶対に真似できないだろうなー」

「ナチュラルにノワールさんをデイスするところとか、まんまこちらの世界のネプテューヌさんと同じですね。…あつ、ところで別次元のネプテューヌさん！貴方に質問したいことがあるのですが、今お時間大丈夫ですか」

「ねぶー！ま、まあ、特に予定はないけど…というよりこの世界のことほとんど知らないんだけど」

あれあれ、なんだか急にデングキコちゃんの雰囲気だ。

「それは良かった。…それなら別次元について、いろいろと聞かせて貰おうかな」

フアミ通ちゃん、お前もか！

「ちよつと、先に質問するのは私ですよ！」

「おつと、こればかりは譲れないな。私が先だよ」

「ぐぬぬぬぬー!!!」

「えーと。…お二人さん、落ちついて…そもそも質問を受けるとは一言も…」

「こうなったら、2人で同時に取材して、どちらがより良い記事を書けるかで勝負ですよー！」

「望むところだよ。…あの時は共同になったけど、今度はちゃんと決着をつけようか！」

「それはこちらのセリフですよ！必ず勝ってみせます！」

「負けるつもりはないよ！」

「うわー、これは面倒なことになる予感がする。…こんな時は逃げるに限るよね。…よし。ぬけあしー、さしあしー、しのびあしー」

わたしはこっそりとその場から逃げ出そうとしたけど、2人に気づかれ肩を掴まれてしまった。

「おやおや、ネプテューヌさん。何処に行くつもりですか？」

「困るなー、まだインタビューができてないのに」

「ねぷ！え、えーと…それはですね…あー！ あんなところに真つ黒な二刀流の剣士と、召喚獣を出せるおバカさんがー！」

「なんですとー！」

「どこ？どこにいるのかな？」

「今だ、逃げろー！」

「しまった、嵌められた！」

「追いかけますよ、待てー！」

「ふははははー、トップスピードになった私に追いつけると思うなー」

……Now Loading……

「うわわわー！あの子達、早！ちよつとずつ距離が縮まつてるよー」

「ゲーム記者を甘くみないでください」

「スクープのためならたとえ火の中水の中。どこまでも追いかけるよ」

「ひいー、お助けー！」

それからすぐに私は捕まり、別次元のや私のことについて、ひたすら質問責めにあつ

た。

ゲーム記者おそるべし。

しかし、この時の私は思いもしなかった。

この後、こっちの世界の女神や女神候補のみんなと会うことになるとは。

さらに、あいちゃんとコンパ主催の武道大会に出場してみんなと戦かったり、みんなと一緒にネプトラルタワーを攻略する事になるとは想像もしてなかった。

「なるほど、なるほど。ではお次は、ステマックスというむつつり忍者ロボについて詳しく」

「私は真顔で喋る海男ってモンスターのことが気になるな」

「もう勘弁してー!」

ねぶねぶの取材はまだまだ続く。

そしてこの話は続かない。

ネプ子さんが激ノワ次元にログインしました。

「私、ネプテューヌ。こう見えてもプラネテューヌの女神様なんだよ！」

「目が覚めたら…ってこれ何回目、いい加減テンプレ化してきてるよね！」

「私と言えば空から落ちてくるのが基本なのに」

「しかも今回の作品はノワールが主役なんだよ！ノワール目掛けて落ちろと言わんばかりなのに、分かってないな」

「もう説明とか面倒だから、そういうのはまるまるカットするよ」

「とにかく！私は今、別次元のラストイションにいるんだよ」

「どうしてプラネテューヌじゃないのかは…君達ならきつと分かってくれるよね」

「いやー、それにしても…一見同じに見えるけど…よく見てみると…私の世界のラストイションと所々違うな」

「どっちかというところ、この世界のラストイションは少し前までいた世界の方に似てるかな」

説明しよう！

私は最近までこことは違う次元に飛ばされていたのである。

そこでは私たち4女神、ネプギアたち女神候補生、ゲーム記者のデンゲキコちゃんやファミ通ちゃんと一緒に高難度のクエストを受けたり、あいちゃんとコンパ主催のギョウ界チ武道会に出場したり、ネプトラルタワーの頂上を目指してみたり、いろんなことをしたんだよ。

「いやー、中でも特に：ギョウ界チ武道会の決勝戦。私VS私は、アタタタターって叫ぶ有名な某漫画のラストの兄弟バトル並の名勝負だったよ」

「お互いに壮絶な技の応酬でポロポロになって。「次の一撃で決着をつけようぜ」みたいなこと言って、私はヴィクトリースラッシュ、あつちの世界の私はネプUスラッシュをぶつけ合ったんだよ」

「その結果は私の勝ちで、めでたく私が優勝したんだよ。：いやー、それにしても私ってば強すぎるよねー」

「主人公である私に勝ったんだし、まさに私って、主人公オブ主人公と呼ばれるに相応しい存在だよね」

「この世界でも楽しいことが起こるといいなー」

適当にラストেশションの町を歩いていると、ノワールを発見した。

男の人を引き連れて…ね。

「…なん…だ…と…」

「えー!!なんでノワールが男の人と一緒に!!しかも、なんかいい雰囲気だし…えつ、もしかしてあの2人、そういう関係!?!」

「そんな馬鹿な!ノワールといえば生粋のボッチなのに、彼氏が居るとか絶対にありえないよ」

「もしこの風景をケーシヤが見たら…ああ、想像しただけでも怖いよ」

「…あつ、因みにケーシヤがノワールの友達とか言うのはなしだよ。ノワールはボッチ、これ豆知識だよ」

「でも…彼氏が居るノワールなんて、どう考えてもおかしいよ」

「はっ!さてはあいつ…ノワールに変装したニセモノのノワール、訳してニセノワだな!」

「どつかの場面で登場した、のわーっはっはっはーとか、ぶらつくはっはっはーで馬鹿みたいに笑ってた奴だな」

「そうと分かれば!…やいやい、そこにいるニセノワ!ノワールの格好を真似て何をするつもりだ!」

「のわああー!…い、いきなり出てきて、なに訳の分からないこと言ってるのよ、ネプ

「テューヌー！」

「ふっふっふー。ノワールの姿はまねできても、ボツチなどころはまねできなかったみたいだね。ニセノワめ、私が成敗してやる！」

「だ、誰がボツチよ！誰が！」

「ネ、ネプテューヌ様!? いったいどうされたんです!？」

「もんどろむよー! ニセノワめ、ぼっこぼこにしてやんよー！」

「話を聞かないよー！」

「くらえー、ジャンピング」

「正気なの! ……あーもう。秘書官、貴方は下がってなさい。…レイシーズ」

ネプテューヌの技とノワールの技が激突…

「ねぶー! 目の前に私が居る! えっ、なに、私のそっくりさん。それとも、ファンクラブの人?」

「することはなかった。」

「あつ、この世界の私だね。やつほー、元気ー」

「おー、よくわからないけど…元気いっぱいだよー」

「ノリがいいね。流石、私」

「いやいや、君もなかなかのものだよ」

「ネ、ネプテューヌ様が2人!?! いったい何がどうなってるのでしょうか?」

「知らないわよ!... なんなのよ、もー」

.....30分後.....

「なるほどね。このゲームシジョウ界では武将っていう、都市を守護する人がいるんだ。... いいなー、その武将達に私の仕事を押し付けられそうで」

「そつちこそ、優秀でかわいい妹がいるんですよ。羨ましいなー」

「ふっふーん、いいでしょー。でも、ネプギアは私のもの! 絶対に誰にも、たとえ私と言えども渡さないよーだ」

「貴方達、いい加減にしなさい! いつまで喋ってるのよ!」

「ねぷ!... なんだノワールじゃん。どうしたのさ、そんな怖い顔して」

「どうしたじゃないわよ、いきなり襲いかかって来て!」

「もう、何言ってるの。あんなの軽いジョークじゃん。私とノワールの仲でしょ」

「何が、私とノワールの仲よ。私とアンタは初対面なんですよ!」

「もー、細かいことを気にしちゃうだめだよ。そんなんだからポツチなんだよ」

「だーかーらー！誰がボツチよ！貴方の次元の私のことは知らないけど、私にはたくさんのお友達がいるのよ！」

「えー。だってさっき私が、「ノワールは武将のレストアって子や、エステルって子とかに友達が居ないってバカにされてるんだよー」って言ってたよー」

「ねーぷーてゆるぬー」

「ねぷーあ、あれれー、ノワール。かわいいお顔がとつても怖いよ。…ほら、秘書官君も見てるんだし、笑顔笑顔。いつものノワスマイルはどうしたのかなー」

「貴方はいつもいつもそうやって、私をボツチキャラにしようとして。…今日という今日は許さないわよー」

「あ、ヤバイ。これはマジギレ一歩手前だ。…あー、たいへんだー。わたし、今日はツネミとあいーんと会う約束をしてたんだったー」

「早くいかないと2人が心配しちゃうね。じゃあ、そういう事で、まったねー」

ノワールから危険な気配を感じたネプテューヌは、棒読みで適当な事を言い、素早くその場から逃げ出した。

「待ちなさい、ネプテューヌ！」

「待てと言われて待つバカはいないよーだ！」

ノワールはネプテューヌを逃すまいと追いかけていつてしまった。

「ノワール様！…行つてしまいました」

「うんうん、この次元のノワールも、私が知つてるノワールと性格があんまり変わらないね。…違うのはリア充なところかな。…あれ、それつてだいたい違うんじゃない？」

「まあ、いいや。…いやー、それにしても…君、秘書官君だっけ」

「はい、そうです。別世界のネプテューヌ様」

「君つてば本当に運がいいよねー」

「はい？それはいったいどういうことですか」

「いやー、もしこの世界にケイやケーシャがいたら君…無事じゃ済まなかつたよ」

「ケイ？ケーシャ？それはいったい、どのような方ですか？」

「ケイは私の世界のラスティシヨンの教祖をしていて、ケーシャはラスティシヨンにある学園の生徒なんだ」

「それでもつて、もしこの世界にケイがいたなら…ノワールと付き合うならあーだこーだ…つて言いくるめられて、君は今以上にこき使われてたよ」

「それは…随分とその…あくどい方ですね」

「悪い人じゃないんだけどね、ノワールやユニちゃんとは仲いいし」

「それでケーシャがいたなら君は今頃…とても悲惨なことに…」

「ひ、悲惨ですか。そのケーシヤという方はいったい何者なんですか!」

「うーん。ちよつと…いや…かなーり、ノワールと仲良くなりたいたいだけのノワールのお友達だよ。…本人が言うには…」

「そ、そうですか」

「気まずい沈黙が起こった。

「…えーと、とりあえずケーシヤに関する話はここでお終いにしよう。うん」

「そ、そうですね」

「それじゃあ、私としては、そろそろ君とノワールの関係について、詳しく聞きたいかなー」

「僕とノワール様の関係ですか!」

「うん。どっからどう見てもそういう関係にしか見えないし。ノワールとの馴れ初め話とか、教えてくれないかな」

「別に構いませんが。…僕とノワール様はその…まだ、そういった関係では…」

「おーと…まだ、ということとは…少なくとも君はノワールとそういう関係になりたいってことでいいんだね」

「ああ、いや。…今のは…その…」

「おーおー、分かりやすく慌てちゃって、かわいいー。…分かったよ、今のは聞かなかつ

たことにしてあげるよ」

「そうしてくれると助かります」

「それで話を戻すけど、君とノワールの馴れ初めとかを教えてくださいな……私の世界のノワールや、ノワールの妹のユニちゃんのいろんなことを、たっぷり教えちゃうよ。どうかな？」

「……分かりました。僕とノワール様の出会いや今までの出来事を話したいと思います。……そのかわり、そちらの世界のノワール様の事を教えてくださいな」

「おっけー」

秘書官君からこっちの世界のノワールとの体験をいろいろと教えて貰った。

そのお礼に私は、私の世界のノワールやユニちゃんのことをたくさん教えてあげた。秘書官君の話を聞いた感想はただ一つ。

お前らもう付き合っちゃえよ。

そして、この時の私は想像もしてなかった。

この後、こっちの世界のボールやブラン、武将たちと仲良くなったり、ちっちゃいーすんの依頼で出会ったステイングやティアラって子たちのお手伝いをする事になったりするとは。

そして、倒したはずのマザコングがパワーアップして復活して、私たち全員で戦う事

になるとは思ってもいなかったよ。

「だからね、ノワールとユニちゃんは変なロボットに好かれやすいから…この世界で変なロボットが出たら要注意。絶対にノワールを近づけない方がいいよ」

「分かりました。これからはおかしなロボットには注意することにします」

「それにねー」

続かない。

ネプ子さんがPP次元にログインしました。

「おはよう、私は女神パープルハート。いきなりだけど、斬ってもいいかしら？」

「…なーんて、冗談だよー」

「今さら自己紹介する必要はないかもしれないけど、もうテンプレ化してるから一応ね」
「やあやあ、私の名前はネプテューヌ。最近の悩みは、目覚めたら別次元に飛ばされてる
ことだよ」

「いや、ほんと。言葉通り。目が覚めたら、なんじゃこりやー！状態だから」

「苦勞の末、ようやく元の次元に戻れても…しばらくしたら、また別次元に飛ばされちゃうんだ。休む間もないんだよ」

「そして私は今、プラネテューヌにいます。街の雰囲気が明らかに違います」

「うわー、これはとても嫌な予感がするよ…私の気のせいであつて欲しいな」

……………

「えーと…なにこれ。…町の雰囲気がおかしいよ」

「なんだか…私のファンクラブの人や、ネズミみたいな雰囲気の人が、あっちにもこっちにもたくさんいる」

「しかも、アイドルグッズの専門店があちこちに開店してるし。なんか私のグッズが売られてるし」

「これは間違いないかな…プラネテューヌで…アイドルブームが起こってる！…私の知らない間に何が起こったの！」

「…うーん、考えられるのは…またボールが気まぐれで何か変なことを始めたのかな。…それとも5pbちゃんが久しぶりに私の作品で登場して、OPでも歌ってくれたのかな」

あつ、並みに。リメイクでの登場はノーカンだよ。

私は新作での再登場を望んでいるんだよ。

「あと、考えられる可能性は…ここが別次元のプラネテューヌくらいかな」

「もしそうなら…勘弁して欲しいな。最近じゃあ、別の次元に飛ばされてもネプギアとコンパくらいしか私の心配してくれないし」

「いーすんなんて、まるで私が悪いかの様に怒ってくるし。…別次元に飛ばされるのは、しばらく無しにして欲しいよ」

「…まあでも…いざとなったら私の主人公補正バリバリで、なんともなるよね！」
「なんとと言っても私、主人公ですから！ドヤア！」

……Now Loading……

「ねつぶく、ねつぶく。…んっ、あれは！」

ネプテューヌが鼻歌を歌いながらプラネテューヌを探索していると、ビルの巨大なスクリーンからアイドルのPVが流れ始めた。

「~~~~♪」

「おー、スタイリッシュでクールな美人が歌ってる。…何、この人…5pdちゃんやツネミに匹敵するぐらいの歌唱力だよ」

「えっ、あーん？…どんまい」

説明しよう。ツネミとあーんとは私が少し前までいた別次元、ゲームシジョウ界で仲良くなつた武将の2人で、アイドル活動もしてるんだよ。

まあ、あーんはアイドル兼芸人って感じなんだけどね。

「…って、あれ。よく見たらこの人って…女神化した私じゃん！…それにバックダンサーがあいちゃんとコンパだ！」

「えっ、何これ！私いつの間にかアイドルになってる！」

そう、なんと美声で歌うスタイリッシュでクールな美人は女神化した私であり、バックダンサーは私の親友、あいちゃんとコンパだったのだ！

「照れながら踊るあいちゃん、かわいいー！…あつ、終わっちゃった。…つて次は女神化したノワールとユニちゃんが！」

その後も女神化したブランとロムちゃんラムちゃん、そして最後に女神化したベールとネプギアがデュエットしたPVが流れた。

「ちよつと待って！なんでネプギアはベールとデュエットしてるの。普通は私とだよね！」

「あーもう、何がどうなってるの」

「ベールに乗せられたりして、何度かネプギアと一緒に歌ったことはあったけど。…女神の姿で歌ったことなんてないし、照れながらバックダンサーやってる、かわいいあいちゃんを忘れるわけないし…もしかしなくても、ここは…別次元のプラネテューヌなのかな」

「…あれ、お姉ちゃん！どうしてここにいるの!?!」

「ねぷー！この声は…おー、ネプギア！それに…」

「こんにちは、ネプテユーンさん」

「こんにちは（ぺこり）」

「やつほー、ネプテユーンちゃん」

「ユニちゃん、ロムちゃん、ラムちゃん。やつほー！いやー、こんなところで会うなんて奇遇だね」

「またまた、説明しよう！この四人は女神候補生と呼ばれていて、私たち女神のかわいい妹なのである。」

ネプギアは私の妹。ユニちゃんはノワールの妹。

ロムちゃんとラムちゃんはブランの妹なんだよ。

えっ、ベールの妹？…たくさんいると思うよ。パソコンやゲーム機の画面の中に。

「いやいや、呑気に挨拶してる場合じゃないよ。今日はリーンボックスでお姉ちゃん、ノワールさん、ブランさん、ベールさんの4人で大規模なライブをするんですよ！どうしてまだプラネテユーンにいろの！」

「そうだったわ！今からだど、急がないと間に合いませんよ！」

「大変！遅れたりしたら、お姉ちゃんカンカンだよ」

「一大事。（あせあせ）」

「あわわ、ちよつと落ちついて…えーと、実は私はね…」

……ねぶねぶしよ……

私はネプギアたちに、私がこの世界とは別の世界から来たと思わしいことを話した。そして、私の世界のプラネテューヌの様子。ついでに最近、よく別次元に飛ばされることを話した。

ネプギアたちも最初は半信半疑だったけど。

私の服装がこの世界の私の服装とは微妙に違うことに気づいてくれて、それからはトントン拍子に話が進んで。

最終的に私が別次元の私である事を信じてくれた。

そして今度はネプギアたちが、この世界のことを教えてくれた。

予想はしてたけど、この世界では私たち4女神がアイドルに奪われたシエアを奪還するためにアイドルデビューをしたらしい。

シエアの力で敏腕プロデューサーを異世界から呼び出して、アイドルたちとのぎを削ったらしい。

最終的にシエアは取り戻せて、プロデューサーは元いた世界に返しちやっみたい。でもシエアをまたアイドルに奪われないように、アイドル活動はまだ続けているみた

いだよ。

「しかし、下っ端や七賢人がプロデューサーしてたり、マジエコノ又四天王全員がアイドルデビューしてるなんて…あいつらがアイカツしてる姿なんて想像もできないよ」

特に幼女好きの変態と暴れることしか頭にない脳筋の2人。

変態に至っては、ロムちゃんとラムちゃんを応援してるファンの方がしつくりくると思っただけだな。

「それにしても、私たちがアイドルか…。…5pbちゃんやツネミはともかく、あいーんを見てるとアイドルの大変さがよくわかるんだよね。…プロデューサーが相当優秀だったのかな」

「あいーん?…あはははー。誰それ、芸人さん」

「うん、そうだよ。あんまり売れてないけど」

「プロデューサーさんは優秀なだけじゃなく、とてもいい人でした。私とも、ゲームとかで遊んでくれたんですよ」

「私もそう。…楽しかった」

「それに…嫉妬しちゃうくらい、お姉ちゃんたちと仲が良かったんだよ」

「そうそう、聞いてください。ネプギアたら、ネプテューヌさんがプロデューサーさんとかばかり仲良くしてるから、寂しさを紛らわせるためにネプテューヌさんそっくりの口

ボットを作ったらしいですよ」

「ユニちゃん！その話はしないでよ」

「あー、その話し知ってる。最終的にそのロボットはネプテューヌちゃんがぶっ壊したんだよー」

「そっかー。こっちの私は、ネプギアがこじらせちゃうくらい、プロデューサーと仲良かったんだね」

「ネプテューヌさんだけじゃないです。お姉ちゃんともとても仲が良かったです」

「お姉ちゃんとも、とっても仲良しだった」

「ベールさんとも仲が良かったですよ」

「要するにたらしだったと。…少し前までいた世界の秘書官君といい、私たちってそういう男の人に弱いのかな?」

「…あつ、ところで。さつき、こっちの世界の私がライブをやるのか言ってたけど。みんなは見に行ったりしないの?」

「…大変！すっかり忘れてたよ!」

「今からなら、急げばギリギリ間に合うわ」

「たいへん、たいへん！（あせあせ）」

「早く行かないと!」

「うん、そうだね。…ごめんね、別次元のお姉ちゃん！私たち…」

「あー、みなまで言わなくても分かるよ。…応援、頑張つてね」

「…ねえねえ、せつかくだからネプテューヌちゃんも一緒に行こうよ」

「えっ、私も。良いの！」

「勿論ですよ。…正直、見ず知らずの場所で知人を見捨てるのは、どうかと思っていたので」

「ネプテューヌさんの世界のお話…もつと聞きたい」

「それに私たちから言うよりも、別次元のお姉ちゃん自身が、お姉ちゃんたちに自分のことを話してくれた方が信じて貰えるよ」

「…ありがとう。…みんな、本当にいい子だね。…いい妹を持って、私は幸せ者だよ」

「そ、そんな…褒めすぎだよ」

「よーし、それじゃあ。時間もないみたいだし。リーボックスのライブ会場目指して、出発進行だよ！」

「おー！」

「おー！」

「あつ、置いて行かないでよ」

「ちよっと、待っててください。そもそも、ライブ会場が何処にあるのか知ってるんですかー」

その後、私たちはギリギリだったけど、無事にライブ会場にたどり着くことが出来た。ライブ会場では一悶着あって、それがきっかけでこっちの私たちとも仲良くなった。そしてこの時の私は想像もしていなかった。

この先、この世界で5pbちゃんがデビューして、シエアが根こそぎ奪われてしまう事になるなんて。

そして5pbちゃんに対抗するため、例のプロデューサーを呼び出して、私も加えた女神と5pbちゃんに壮絶なシエアの奪い合いをことになるとは。

「だからね。あのブランがブランちゃんです♡とか言いながら、かわいい子アピールしてた次元もあったんだよ。いやー、あれは傑作だったよ」

「あはははー、何それ！お姉ちゃんがかわいい子アピールとか！想像できないよー！」
「ブランちゃん…かわいい」

「ノワールはノワールで、私の世界のノワールは水着を逆に着てドヤ顔してたり。別次元では調子に乗ってぶるんに締められたり、マザコングに騙されたり。ダメダメなんだよ」

「お姉ちゃんは調子に乗りやすかったり、おっちょこちょいなどころがありますから」
「ベールも妹に飢えてたり、気まぐれで変な事したりしてさー」

「その一方で、私は別次元に飛ばされるたびに、その世界を救う大活躍を繰り広げて、まさに主人公にふさわしい活躍をしてるんだよ！ドヤア！」

「すごい。流石、お姉ちゃんだね」

続かない。

ネプ子さんが激ブラ次元にログインしました。

「グッドモーニング！みんなのアイドル、ネプテューヌ だよー！」

「あつ、因みに、今は朝じゃないとかそういうツツコミはなしだよ」

「こほん。…えー、ではさっそく本題に入りますが。…最近私は別次元に飛ばされることがあります」

「そして私は今、全く知らない場所にいます」

「そしてもう一つ…私の目の前には全く知らない学校のようなものがあります」

「はあー、これはもう…別次元確定だね」

「しかも、いつもならプラネテューヌとかラステイションとか、私の知ってる場所からスタートなのに…今回は全く知らない場所！…こんなのがみんな達が居た次元以来だよ」

「前回飛ばされた次元が、楽しくアイカツしてシエアを集めれば良かった、イージーな世界だっただけに。…この次元はひたすら戦って戦って戦いまくるハードな世界のような気がするよ。…もし、そうだったら面倒だなー」

「まあ、でも…私、主人公だし。いざとなったら主人公補正でどうとでもなるよね」

「よし、それじゃあ。そろそろ村人A的な人を見つけて、この世界のことを聞くとします

か。最初に飛ばされた時みたい、あいちゃんでも通りかからないかなー」

しばらく学校の敷地を探索していると、2本の刀を背負った制服姿の女の子を発見した。

「おつ、あの人なんかいいかも……へい、その刀を背負った青髪の彼女！ちよつと質問したいんだけどー！」

「んっ、それはもしかしなくても、あつしのことかい？」

「そうそう。……おー、君の胸元の人形、かわいいねー」

「そいつはどうも……って。なんだ、ネプテューヌか。あつしを引き止めて、いったい何の用だい」

「あれあれ？もしかしなくても、私とお知り合い」

「おいおい、なにを言ってるんだ。悪ふざけなら他所でやってくれ」

「うーん。君の反応を見るに……この世界にも私がいるんだね！……やったー！主人公オブ主人公の私もう一人とか、イージーモード確定だね！」

まあ、私が飛ばされた別次元全てに、必ず私がいるんだけどね。

「なんだ、いきなり訳の分からない事を……いや待て。……そうか。……さては、あつしに秘密で新しい撮影でも始めたな。……大方、この会話もどこかで、撮影してるんだろう。何も

知らないあつしの反応を撮るために」

撮影？この世界の私は何をしてるんだろ？

「いや、全然違うよ。…うーん、長くなるかもしれないけど実は…」

……説明中……

「あー、つまり…お前さんは別世界から来たネプテューヌだっていうのかい？」

「うん、そうなんだよ。信じられない話かもしれないけど」

「いや、お前さんの目は嘘をついてる目じゃなかった。つまり、お前さんが言ってることは正しいんだろう」

「信じてくれるの！わーい、ありがとう」

「礼を言う必要はない。…しかし、こいつは参ったな。正直、お前さんが語ってくれた別世界の話を、あつしはこれっぽっちも理解しきれていない」

「いやいや、私が別次元から来た事を信じてくれただけで充分だよ。…そんなことよりも、そろそろ君の名前を教えて欲しいな」

「おっと、こいつは済まない。まだ、名乗ってなかったな。…あつしの名前はタムソフト。よろしくな」

「よろしくね、タムソフトちゃん。…それで、さっそくなんだけどさ…私にこの世界のことをいろいろ教えて欲しいな」

「お安い御用だ。さて…まず、何から話したものか」

「見つけた。こんなところにいたのね、タムソフト」

「いやー、探したよー」

私に何を説明をするか考え込んでいたタムソフトちゃんに、2人の女の子が話しかけてきた。

1人はベレー帽を被ったブラウン髪の子。

そしてもう一人は、いかす脳波コンの髪留めをつけたピンク髪のもともかわいい女の子。

「あれ、誰か居る。…おー、君、かわいいね！」

「そう言う君も、アイドル並みのかわいさだよ。今度、アイカツしてみれば」

「そうかな。いやー、照れるな。…あれ…てか、よく見たら私じゃん！えっ、君、何者!？」

「おお！私も今、気づいたよ！道理でかわいいわけだね」

「おお、2人ともちようどいいところに。今、この別次元のネプテューヌに、この世界の

事を説明するところだったんだ。お前さんたちも協力してくれ」

「なーんだ、別次元の私かー。……って、ええー!」

「貴方、何を言ってるの?まるで意味が分からないわ」

「あー、また説明かー。面倒だなー」

……Now Loading……

こっちの世界の私とブランに、私が別次元から来た私である事を説明した。

タムソフトちゃんの説得もあって、2人は割とすぐに信じてくれた。

その後3人から、この世界の事を大まかに教えて貰った。

「なるほど、ここは守護女神が通う学校で…最近までハチマジーンって奴のせいでゾンビが大量発生してた」と

「そうそう。それで廃校の危機にあったこの私立ゲーム学園を救う手立てを考えた私たちが映画研究会は、これ幸いと」

「私が監督兼脚本のもと、本格的なゾンビ映画を撮影することに決めたの」

「そんなでもって、面白そうな事を嗅ぎつけたあつしや、この学園の危機を救う目的でノワールたちが加わり」

「最終的にハチマジーンをやつつけたと。…よくそんな、行き当たりばったりなことやる気になったね」

まあ、私もあんまり人のことは言えないけど。

特にぶるるんやぴー子達がいる次元を冒険した時は、我ながら行き当たりばったり過ぎたと思うよ。

「まあ、そうかもしれないけど。全て上手く行ったんだし。結果オーライだよ」

「そうね。ハチマジーンを倒して、賞も貰えて、廃校も阻止できた。まさに完璧」

「終わり良ければ全て良しってとこだな」

「そっかー。…あつ、因みにだけど…みんなから見て映画の出来はどうだったのかな？」

「ど、どうって…：…ねえ」

「ま…まあ、アクションシーンは良かったぞ。アクションシーンは」

「笑いあり、涙ありの近代稀に見る素晴らしい傑作だったわ。我ながら自分の才能が恐ろしい…」

「そ、そうなんだー、よかったねー」

ブランは絶賛してるけど…：2人の反応からして…：多分駄作だったんだろうなー。

「なんと言つても、本物のゾンビを使って撮影できたの良かったわね」

「いや、あの…作品のことはもうお腹いっぱいなんだけど」

「墜落して来た人工衛星からゾンビウイルスがばら撒かれるなんて誰も思いつかないでしょうね」

「あー、ブランさーん」

「泣いている子供役をタムソフトとベールにやらせたのも、インパクトがあつて良かったわ」

「あつ、だめだこりゃ」

それからしばらく、ブランの自画自賛が始まった。

私たちの様子なんてお構いなしに、このシーンやあそこのシーンが良かったとか語り始めた。

なんか話を聞く限り、酷いB級映画としか思えないんだけど。

そんなこと言ったらキレそうだし…あー、早く終わらないかな。

……数時間後……

「女神化したプルルートを敵の重要な幹部にしたのも名采配だったわね。さらに…」

…もうさつきら、ずっと喋りっぱなしだよ。

しかも自画自賛ばかり。いい加減飽きたよー。

でも下手に口を挟めば何されるかわからないし。

なんとか穏便に終わらせる方法はないのかな?…そうだ!

「ねえ、ブラン。さつきまでタムソフトちゃんを探してたけど…何か用があったんじゃないかな」

「うずめを…つてそうだったわ。作品を語るのに夢中で忘れていたわ」

「そ、そうだよ!新しい映画を撮影するのにタムソフトの協力が必要だったんだよ!」

「そいつは面白そうだ。いいぜ、協力してやるよ」

「そう言つて貰えると嬉しいわ」

ふう、なんとか話を止めさせる事が出来たよ。

ファインプレーだね。流石、私。

「…ねえ、別次元のネプテューヌ。…ここで会ったのも何かの縁。貴方も撮影に協力してくれないかしら。」

「えっ、いいの!映画撮影とか面白そうだし、やりたいやりたい!」

「貴方ならそう言つてくれると思つたわ」

「私がもう一人出演とか、神作品間違いなしだね!」

「こいつは楽しくなりそうだな」

「みんな、しばらくの間だと思うけど。よろしくね!」

こうして、私はこの世界のブラン達の映画撮影に協力する事になったんだよ。

そしてこの時の私は想像もしてなかった。

こっちの世界のみんなと仲良くなって、映画撮影を始めて早々、モンスターが大量発生する事になるなんて。

さらに、復活した残りの八魔神の7体と戦うことになるとは想像すらしてなかったよ。

そして、最終的にできた映画がまたしてもB級感丸出しの作品になるとは想像もしてなかった…いや、ごめん嘘。それだけは想像できてたよ。

「ネプテューヌが2人…双子設定とかいいかもじゃないわ。もう一人の人格設定も捨てがたいわね」

「いやー、それにしても…さっきは助かったよ。流石、私だね」

「なんと言っても私、主人公ですから。ドヤア！」

「ははは。お前さんは何から何まで、そこにいるネプテューヌと同じだな」

「服装は違うけどね。…そうだ！ねえねえ、こっちの世界で何か面白エピソードとかあったら、教えて欲しいな」

「それならとっても面白いのがあるよ。その名も、魔法少女アイドル☆マジカル☆ノワ

リン」

「あはははー、何それ！名前を聞いたただけなのに、笑いが止まらないよー」

「いやー、ノワールが廃校を阻止するために痛い衣装で歌う動画をアップしたんだよ。まあ、結果は当然のごとくバッシングの嵐だよ」

「あー、なんかその場面が容易に想像できるよ。…私の世界や別次元のノワールもね、面白いんだよー。例えば…」

「コメディいや、サスペンス、ミステリーも捨てがたいわ。…いつそのこと全てを混ぜて…」

続かない。

ネプ子さんが四女神オンライン次元にログインしました。

「やつほー、人気ナンバーワンの主人公、ネプテューヌだよー」

「なんか目が覚めたら見知らぬ町にいたただけど…どうやら、また別次元にきちやつたみたいなんだ」

「はあー、別次元に飛ばされるのもこれで何度だろ」

「はいはい分かってますよー。どうせこの世界でも、世界の危機！的なものが起こって…この世界の私たちと力を合わせて、この次元を救わなくちゃいけないでしょー」

「あー、めんどいなー」

説明しよう！何故私ここまで消極的かというと、前回いた別次元が戦いの連続だったからである。

「いやー、本当にめんどくさかったんだよ。八魔神の残りの7体にダークメガミ、挙げ句の果てには私たち四女神の偽物などなど、有名な某シューティングゲーム並みの怒涛のボスラッシュだったんだよ。おまけに雑魚敵もうじやうじやいたし」

「いつメンに加えてタムソフトちゃん、ぶるるん、ピー子、うずめ、デンゲキコちゃんに

ファミ通ちゃんがいだからなんとかなったけど……もうあんな世界は2度とごめんだよ」
「……さてと……文句ばかり言っても始まらないし。そろそろこの町の探索を始めるとしますか」

……………

しばらくの間、町を探索していると見知った人物を見つけた。

「おお、あの後ろ姿は……変なコスプレしてるけど間違いない、ボールだ！おーい、ボール
！」

「おや？この声は……まあ、ネプテューヌではありませんの。ごきげんよう」

「やつほー。いやー、来て早々、ボールに会えて良かったよー」

「まあ、それは光栄ですわ。……おや？……ですがこの時間帯はネプギアちゃんとお出掛けをするため、ログインはしない予定だったのではありませんの？」

「ログイン？……もー、何言ってるのさ。ゲームのやり過ぎでついに現実とゲームの区別がつかなくなっちゃったの」

「貴方こそ何を言ってますの。……はっ！まさか……長時間ログインしている間に、ここがゲームの中であるということ忘れてしまったのですか」

「いやいや、確かに私たちはゲームのキャラクターだけどき。そういうメタな発言はしない方が」

「何を言ってますの！ここは小説、厳密に言えば2次創作の中でしてよ。つまりわたくしたちは小説の登場人物と表記するのが正しいですわ」

「いやだから、そういうのは言わないお約束でしょ」

「だが断る！ですわ」

「もー、なんで私がツツコミとかしなくちやいけないの！私は基本ボケ担当なんだよ。こういうのはノワールとかブランの役目なのに」

「良いではありませんの、たまにはこういったのも」

もう、調子狂うなー。ベールめー。

…でも、なーんか話が噛み合っていないよね。

もし、ベールの話を鵜呑みにしたら…この世界はゲームの中ってことになるよね。

ただしくはゲームの中のゲームの世界？いや、ゲームの世界の別次元のゲームの世界のゲームの中？

なんか頭がこんがらがってきたよ。

「えーと…ベール。…もしかしなくても…こっつて…ゲームの中なの？」

「ええ、そうでしたよ。何をいまさら」

ベールの当然だろみたいな反応からして、これはガチみたいだね。

「やつぱり、そうなんだ。：私、遂に：ゲームの中にまで来ちゃったんだね」

「：流石、私！主人公オブ主人公！こんなの1作品だけ主人公だった、どっかの誰かさんたちには絶対に真似できないよね！」

「ネプテューヌ、本当にどうされましたの？今日の貴方はいつにも増して変でしたよ」

「そっかー、まだ説明してなかったね。いや実は私……」

……説明中……

私は別次元から来たことや、様々な別次元に飛ばされ経験がある事とかを説明した。

そして、ベールからはこの世界の事を教えて貰った。

「なるほど。ここはベールがいつも遊んでる四女神オンラインがVRMMOになった世界なんだね」

「ええ、そうですね。そしてここはウイシユエルという町でしたよ」

「私たちをモデルにした女神様が居るんだー。一度でいいから会ってみたいなー」

「……ってあれ。これってあれだよね……私だけHPが0になったら終わりだよね。……何そ

の某ラノベ作品並みのデスゲーム。私もゲームをクリアするために黒い服着てビーターにならないといけないのかな」

「慌てることはありませんわ。先程も話した様に、すでにこのゲームはクリアされていますよ。それに万が一にHPが0になったとしても、ブランやネプギアちゃんの復活魔法や復活アイテムなどがあるので安心してくださいまし」

「そっかー、それなら安心だね。いやー、今まで冒険したいろんな次元でも、復活魔法やアイテムに何度助けられたかー。死んでもいいゲームなんてヌルすぎだね!」

「ええ、そうですね。…ですが、思い返してみれば、チートを使うチーターやこのゲームの危機、そして魔王との決戦など様々な強敵との戦いがあり、わたくしたちも幾度となく倒されてしまいましたわ。ですが、わたくしと5人のかわいい妹と女神様、そして3人の愉快な仲間たちと力を合わせて、切り抜ける事ができましたよ」

「5人のかわいい妹?…えーと、誰のことかな?まあ、なんとなく想像はつくけど」

「当然ネプギアちゃん、ユニちゃん、ロムちゃん、ラムちゃん、そしてブーケちゃんの5人ですわ」

「こらー、ナチュラルにネプギアを妹にカウントするな。…というか、ブーケちゃんって誰?」

「ブーケちゃんはこの世界のNPCであり、主にメインクエストの助言やサポートをし

てくれますの。とつてもかわいいく、いい子ですよ。ああ、話している内に、今すぐブーケちゃんに会いたくなってきましたしまいましたわ」

「そ、そうなんだー。念願の妹ができてよかったねー。私の世界や別次元でのボールも随分と妹に飢えてたからね」

「まあ、その代わりに、いろんな子を可愛がってたけどね」

「いろいろな子。…それは一体どなたですの？もしよろしければ教えてくださいません
ハハハ」

「うん、いいよ！えーと、女神候補生の四人でしょ。教祖のチカでしょ。ピー子でしょ」

「まあ、その子たちでしたら、わたくしも全員可愛がってますわ」

「それに、ゲーム記者のデングキコちゃんでしょ」

「デングキコちゃんですか。…存じてはいるのですが、それほど面識はありませんわ。…今度お茶にでも誘ってみようかしら」

*デングキコちゃんとボールさんの絡みはネプウのリリース会話であります。

「アイドルのあいーんでしょ」

「あ、あいーん。それはいったいどんな方ですの？」

「あとは…そうだ！ヒールスライヌのヒールちゃんが残ってたよ。…だいたいこれくらいかな」

えっ、あいちゃん？何のことかな？

私、1作品目の記憶は持ってないから。

今まで説明してなかったかもしれないけど、私mk2からのねぷ子さんですから。

「ヒールスライヌですの。…いいえ、他次元のわたくしがかわいがるということは、きつととてもかわいくいい子に決まってますわ。そのヒールちゃんについても詳しく聞いてもよろしいかしら」

「うん、いいよ…：そのかわり…：この世界の事をもっと教えてほしいな」

「お安い御用ですわ」

この時私は想像もしていなかった。

この先、この次元の私たちや女神様達と知り合うことになるなんて。

そして沢山の高難度クエストを、ブーケちゃんや女神様、キリアや猫姫ちゃんとかと力を合わせて挑戦することになるなんて。

そして私が元の次元に帰った後、正規サービスが始まると、何故か私たちの次元や別次元からもログインができるようになって。

私たちの次元のみんなは勿論のこと、ぶるるんやうずめがいる次元のみんな、せがみんやセハガールたち、デンゲキコちゃんにファミ通ちゃん、秘書官君や武将たち、プロ

デューサー、タムソフトちゃんなどなど、今まで仲良くなったみんなもログインして大冒険をすることになるなんて。

そして同時に確信もしていた。

これからも私は色々な別次元に飛ばされたり、私たちの次元や別次元で様々な騒動に巻き込まれる事を。

その度に挫けず仲間たちと力を合わせて、必ず解決する事ができるってね。

「あゝ、ねぶちゃんだゝ」

「おお、ねぶつちじゃないか」

「ねぶねぶです」

「おお、今まで出番のなかったキャラたちがここぞとばかりに！」

「ねぶてぬーっ！」

「ぬあああー！……ぴー……ぴー子？……な、なんで、こういう町って普通、ダメージが入らないんじゃない？」

ねぶ子さんが別次元にログインしました……終わらない。

ネプ子さんが支配エンド次元にログインしました。

「私、ネプテューヌ！プラネテューヌの女神パープルハート様とは私のことだ！」

「なんか目が覚めたら別次元のバーチャフォレストに居ました。…以下略……」

「この次元は…なんて言えばいいんだろう？」

「上手く言えないけど、今まで私が飛ばされた次元とは根本的に何かが違う気がするな」

「居心地はいいんだけど…何か…大切なものがないとも言えないのかな？」

「なんだろう、このいやーな感じ」

「まあ、いいや。…それじゃあ、いつもみたいに探索を始めるのでしょうか」

………

「ねぶ、ねぶ、ねぶっ！…おお、ここは！」

「確か、昔よくネプギアと遊んだ場所だ！うわあー、懐かしいなー」

「あの頃のネプギアはこんなちっちゃかったっけなー。…それが今では立派に育ちまし

たなー」

「それもこれも、私の教育のおかげだね！いやー、流石私！お姉ちゃんの鏡だね！」

なーんてね。…実際は私だけの力じゃないんだよね。

犯罪組織がゲームギョウ界を支配しようとして私たちが捕まっちゃったあの時に、いろんな出会いや経験を経て、あそこまで成長したんだよね。

あの時は完全に主人公の座を奪われちゃったなー。

零次元の時も私よりネプギアの方が主人公してたし、うかうかしているとまた主人公の座を奪われちゃうかも。

「いくら可愛い妹とは言え、主人公の座だけは絶対に渡さないよ！ネプギアだけじゃない…ノワールにも、ブランにも、あいちゃんにも…主人公オブ主人公の名にかけて！」
私は新たに決心を固めるのであった。

……Now Loading……

「…おねえ…ちゃん？…嘘…おねえちゃん…なの？…」

「おお、ネプギアじゃん！噂をすれば。…あれ、どつたの？そんなに驚いた顔して？」

それになんだか様子がおかしい。

目が虚ろって言えばいいのかな？

「お姉ちゃん…お姉ちゃん！」

「ねぷ!? ど、どうしたのネプギア!いきなり抱きついてくるなんて」

「お姉ちゃん!お姉ちゃん!お姉ちゃん!」

「…おーおー、よしよし。よくわからないけど、ネプギアの気の済むまで甘えさせてあげるよ」

「うわあああーん!!!」

私はしばらくの間、ひたすらネプギアをあやし続けた。

……………

「そう…なんだ…この世界ではそんな事があったんだね」

どうにか話せるくらいにまでネプギアが落ち着いたあとと少しずつだけど、どうしたのか聞いてみた。

すると、ネプギアから聞いた内容は衝撃的だった。

どうやらこの次元では私の次元でも起こった、犯罪組織マジエコノムが世界を支配しようとして暗躍してたらしい。

日本一とがすとが居なくて、そのポジションにREDって子とぷち子が居たこと以外は概ね、私の次元と同じように物事が進んでいって、犯罪神との決戦の前にそれは起こった。

…まさか犯罪神を倒すために、ネプギアが女神を殺すほど強くなるらしいゲハバーンとかいう武器を使つて、私たち四女神と、ネプギアを除いた女神候補生達を殺したなんて…とても信じられないよ。

いつだったか、ネプギアやあいちゃんが旅の最中にそんな武器の伝承を聞いたとか言つてた気がするけど、本当にそんなものがあつたなんて…。

この世界のネプギアだつて必死に頑張つてたのに。

世界を救うために必死で戦い続けた結末がこんななんて…あんまりだよ。

もしこの世界にぶるるんやピー子、うずめみたいな他の守護女神がいたら。

この世界にはいないメーカーキャラのみんなや、ゴールドサアドの4人がいたら。

別次元で出会つた、ぜがみんやセハガールたち。デングキコちゃんやファミ通ちゃん。武将のみんなや秘書官君。プロデューサー。タムソフトちゃん。ブーケちゃん。キリアや猫姫ちゃん。誰か1人でもいれば、この世界の命運も変わつていたかもしれない。

ちよつと、その君！秘書官君、プロデューサー、ブーケちゃんはいても役に立たな

いだろとか思ったでしょ！

あの3人は有能だし役に立つよ…多分。

「相当辛かったんだね、苦しかったんだね…大好きなみんなを…」

「…お姉ちゃん…私もう…ダメ。…限界なの」

「限界？」

「倒す寸前に犯罪神が言ったの…女神が一人だけしか居ない世界は平和だろう。…でも争いのない世界に競争は生まれない、発展も成長も生まれない、やがて衰退していくつて」

「結局、犯罪神の言った通りだった。発展も成長もないこの世界は確実に、少しずつ衰退していつてる」。

「それに他の国の教祖の皆さんとは距離を置かれてちゃつて…一緒に戦ってくれたアイエフさんやコンパさん達からも忙しいからって、全然会えなくて。いーすんさんも忙しくてろくに話せないで、ここしばらくはいつも一人ぼっちで…」

「ネプギア…」

「なんでこうなっちゃったんだろ。…そもそも私はお姉ちゃん達を助けるために旅を始めたんだよ」

「それなのに、私はこの手でお姉ちゃん達を…お友達になつてくれたユニちゃん、ロムちゃん、ラムちゃんを…」

「そもそも、私はなんであの時プラネテューヌにシエアを集結させようなんて提案したんだらう」

「あんな提案さえしなければみんなと仲違いすることはなかった」

「魔剣だつてそう。あんなもの直ぐにでも壊してれば別の可能性だつてあつたかもしれない」

「もっと他にも手はあつた筈なのに…どうして…なんで…」

「お、落ちて書いてネプギア!」

取り乱し始めたネプギアを落ち着かせるため、私はネプギアを上下に揺さぶつた?

「…もう無理だよ…私一人でこの世界を支えていくのは」

「そんな…」

「…だからお願い。…お姉ちゃんの力でこの世界を救つて!」

「私の力で…か…」

「そして…ずっと、この世界に…ううん…私の側にいて…ずっと、ずっと!…じゃないと私…私。」

「…もう、一人は嫌だよ…」

「ネプギア…」

ちよ、ダメだよ。これ、お馬鹿でお気楽なゆるーい作品なんだから。

こんな鬱展開なんて怒られるだけだよ。

それに私、こういうシリアスな展開は本当に苦手なんだよ。

…でも…流石にかわいい妹をこのままにしておくわけにはいかないよね。

例え別次元のネプギアでも、私にとっては可愛くて大切な妹だよ。

それにこの次元だってこのまま放つては置けないし…よし、ここは一肌脱ぐとしますか。

バッドエンドのまま終わりとか、この私が絶対にさせないよ！

「…しつかりしなさいネプギア！」

「ひっ！」

「この次元はこの世界の私たちがネプギアに託したんでしょ！それなのにそんな弱気でどうするのさ！そんなんじゃないよあ…みんなが浮かばれないよ」

「で、でも…私…」

「それにね。…確かに私は今までいろんな次元を救って来た主人公オブ主人公だよ。…
ただ…それは私一人だけの力じゃないよ」

「私の次元や別次元で仲良くなった仲間たちと力を合わせて、そして私を信仰してくれる人のシェアの力でいろんな次元を救うことができたんだよ！」

「今の私たち二人が力を合わせたとしても、この次元を救うなんて絶対に不可能だよ！」
「そんな……」

「……だからさ。ネプギアの今の気持ち素直に伝えて。コンパやあいちゃんとか、みんなに協力して貰おうよ」

「で、でも私……皆さんから避けられて……」

「違うでしょ。……本当はネプギアがみんなと会うのを避けてるんですよ」

「あっ……う……」

「凶星なんだね。……ネプギア以外の女神がいなくなつて、これからは1人でこの世界を支えていかなくちゃいけないって思ったのかもしれないし、みんなに責められるのが怖かったのかもしれない。……でもね、今のままじゃダメなんだよ」

「大丈夫。みんななら、ネプギアがちゃんと話し合えば絶対に協力してくれるよ」

「でも……ミナさんやチカさんは……」

「もう仕方ないなー。それなら、ミナやチカと話し合う時には私も一緒に説得してあげるよ。……だからさ、弱気になって諦めないで頑張ってみようよ、ネプギア」

「お姉ちゃん。…お姉ちゃん、私、決心したよ。自信はないけど…この世界を救うために精一杯頑張ってみるよ」

「そうこなくちゃね！」

「…ありがとう、お姉ちゃん。弱気になっていた私を奮い立たせてくれて」

「気にしない、気にしない。主人公として…いや…お姉ちゃんとして、困ってる妹を助けるのは当然だよ」

「お姉ちゃん…」

この時の私は確信していた。

たとえ何が起こったとしても絶対にみんなとネプギアを仲直りさせて、力を合わせてこの世界を救うことが出来るってね。

でも1つだけ思いもしなかった。

元の次元に帰った後、私の次元や今まで行ったことのある別次元や、これから行くことになる別次元の仲間たちがこの世界を救うのを協力してくれて、最終的には複数の次元のシエアを一つにすることで、魔剣によって命を落とした7人の女神が復活する事になんてね。

「よし！そんなじゃあ、サクサクといこうか！…まずはあいちゃん、コンパ、いーすんの三人あたりからでも行ってみよう！」

「……」

「あれ、ネプギア…どったの？」

「ゆっくりとしている場合じゃないのは分かってるの。…でも…後ちよつと…ほんの少しだけ…このままでいたいの。…ダメ…かな」

「…もう仕方なあ。あとちよつとだけだよ」

ネプ子さんがアニメ次元にログインしました。

「ねぷー！ー！」

私、ネプテューヌ。プラネテューヌの女神で人気者の主人公なんだよ。

「そんな私ですが、気がつくどパラシユートなしのスカイダイビングの真っ最中でした」
「何を言ってるのか分からないと思うかもしれないけど私も……って、そんな悠長なこと
言ってる場合じゃないよー！」

「これやばい奴だよ！なんで私、空から落下してるの!? しかも、もうすぐ地面だし！」

「ねぷー！落下地点に黒髪ツインテールの少女の姿が！」

「このままじゃあ、ぶつかっちゃうよ！どいて、どいてー！」

「へっ？の、のわあああー！」

………

「あいたたたー。いやー、脳波コンがなければ即死だったよ」

「あっても即死だろとかいう無粋なツツコミは受け付けないよ」

「えーと……ところで……ここはどこだろう？」

私はキヨロキヨロと辺りを見渡してみた。

辺りは草木が生い茂っていた。

「見た感じバーチャフォレストっぽいけど……気がついたら空から落下とか普通じゃないし。……もしかして、ここって別次元なんじゃ」

「はあー、勘弁してよ。……前回飛ばされた次元のネプギアがあんまりにも可哀想だったから、しばらくの間は私の世界のネプギアには心配を掛けさせなくなかったのに……どうしてこうなっちゃうんだろ」

説明は……正直あんまりしたくないけど。

前回飛ばされた次元ではネプギアが私たちを……その……ね……あれしちやった世界だったんだよ。

私たちをあれしちやったことや一人で何でも背負いこんでいたことで、心身共に病んでいたネプギアを私が必死の説得で奮い立たせて、ギクシヤクした関係だったあいちゃん達メーカーキャラやいーすん達教祖との仲を取り持つて仲直りをさせたんだよ。

「あつちの世界のネプギア……元気でやつてるかな。……いろいろと手助けはしてあげたけど……本当の意味で救えたとは言えないよ」

「どうすればネプギアを救うことができるのかな？」

私は柄でもなく真面目に考え込んでいた。

「ノワールちゃん。凄い音がしたけど何かあったの？」

「のわる！どこにいるの！」

「ねぷ！この特徴的なゆったりとした声と元気いっばいな声は！まさか！」

「あゝ、ねぷちゃんだ〜」

「おー、やつぱり、ぶるるんだー！」

今回はちゃんと紹介しよう！

この子はぶるるることブルート。

私がいる超次元とは別に存在する次元・神次元のプラネテューヌの女神なんだよ。

因みに、女神の時の名前はアイリスハート。

お昼寝が大好きで普段はこんな感じでおっとりしてるけど、実は超ドSで女神に変身したらもう手がつけれないんだ。

「ねぷてぬだ！ねぷてぬー！」

「ぬぐうー…び、ピー子！相変わらず、いいタックルだね…」

再び紹介しよう！

この子はピー子ことピーシエ。

ロムちゃんラムちゃんよりもちっちゃいけど、これでもれっきとした神次元の女神なんだよ。

女神の時の名前はイエローハート。

元氣いっぱいな暴れん坊で、私を見つけると全力で体当たりしてくるんだけど、これがまた、信じられないぐらいの一撃なんだよ。

「えーと……ぶるるとピー子が居るって事はここは神次元かな？」

「うん、神次元だよ」

「やっぱりーやったー！この次元ならすぐにも元の超次元に帰れるよー」

またまた説明しよう！

超次元と神次元は私とネプギアといーすんの活躍で自由に行き来ができるんだよ。

「いやでも、最近忙しかったし……どうせすぐ帰れるし、しばらくこの次元でゆつくりするのもいいかも！」

ネプギアごめん、心配させたくなかったけど……お姉ちゃんぐうたらしたいんだ。

でも私の次元のネプギアは強い子だし、私がいなくても平気だよね。

……

「いやー、それにしても…この次元のぶるるとピー子と会うのは凄く久しぶりだね」
「ほえく？この次元く？久しぶりく？」

「ふえ、なにいつてんの？びい、さつきまでねぶてぬとあそんでたよ」

あれ？何この反応？

しかも、ついさつきまでって。

「さつきまでって…ええー！まさか、この次元に別の私がいるの！」

「別のねぶちゃん？ねぶちゃんはねぶちゃんですよ」

「いやそうじゃなくて。…えーと、ついさつきまで私とどんなことしてたの？」

「どんなつて、ゲームとかく、お昼寝とかく」

「ぷりん！ねぶのぷりんたべたよ！すっごくおいしかった！」

「そ、そうなんだ」

うーん、そんな記憶は当然のごとくない。

ということとは、ここは神次元だけど、私の知ってるのとは別の神次元なのかな？

まあ、超次元も複数あつたし、神次元が複数あつてもおかしくはないのかな。

だとしたら…どうしよう。

この2人にはあんまり難しいことを聞いても答えられないきがするし、話しても理解できない気がする。

でも、まだ絶対とは言いきれないしなー。

…そうだ！私を知ってる神次元のぷるるんやピー子なら、絶対に答えられそうなことをいくつか聞いてみればいいんだ！

いやー、こんなことを思いつくなんて流石私だね！

さーて、何を質問しようかなー。

私のことだと答えられそうだしここは…

「ねえ、今から2人に質問したいことがあるんだけど」

「聞きたいことゝ、なーにゝ？」

「くいず！ぴい、くいずとくいだよー！」

「えーと…2人は鉄拳ちゃんって知ってる？」

「鉄拳ちゃん？だーれそれゝ？」

「知らない、なにそれ？」

うーん、どうやら全然知らないみたいだね。

鉄拳ちゃんは知り合いの熊を教会に住まわせてたりしてたから、私の知ってる神次元のピー子たちとはそこそこ関わりを持っていた子なんだけど。

これは…別次元確定かな。

「えーと、いきなりで信じられないと思うけど実は私…」

.....

「ふえ〜、目の前にいるのは私が知ってるねぷちゃんじゃない、別次元のねぷちゃん〜！しかも〜、別次元には別の私やピーシエちゃんがいる次元があるの〜！」

「そうなんだよ。いやー、私も初めておつきい私やバイクの私と出会った時は驚いたよ」「たのしそう！ぴいもちがうせかいにいつて、そのせかいのぴいとあそんでみたい」

「いや、それはちよつと。…ピー子が2人もいたら私の体がもたないよ」

「私も別次元の私とお昼寝したり〜、お人形さんを作ったり〜、お人形さんで遊んだりしてみたいな〜」

ぷ。ぷるるんが2人とか想像しただけでも恐ろしいよ。

もし、もしも2人同時に変身なんかした日にはお前…この世の終わりだよ。

…うん、これ以上考えるのはやめよう。

「ねえ、いつまでもこんな所で立ち話するのもなんだし、プラネテューヌ教会にいらこうよ」

「教会に〜」

「うん。この世界について色々聞かせてよ。教会に居るであろう、ちつちやいいーす

んも交えてさ」

正直、この次元のことや超次元のことはこの2人に聞くより、いーすんに聞いた方が手っ取り早いしね。

「いいよ。教会に行こう」

「それならきようそう！きようかいまできようそうしよ！よーいどん！」

「ああー、卑怯だよ！まてー！」

「わあー、置いてかないで」

この時の私は想像してなかった。

この後、こっちの世界のノワールたちや、もう1つの世界の私たちと知り合うことになるなんて。

そして、ユニちゃんが飼ってるペットのミミなんたらかんたらのクラたんと遊んだり。

R18アイランドのヒワイキビーチで遊んだり、ルウイーの遊園地で遊んだり。子供姿のあいちゃんとコンパと遊んだりすることになるなんて。

そして特に問題も起きなかったから、ぐーたらしたり遊びまくってたら、ちっちゃいーすんに早く帰るためのシエアを集めろってお説教されるなんてね。

「あれ〜?」

「どつたの、ぷるるん?」

「誰か、忘れてる気がするんだよ〜」

「そうなの?…うーん、でも思い出せないなら、きつと大した人物じゃないんじゃないかな」

「うん。それもそうだね〜」

「痛たた。…何なのよ、もう」

「確か…ネプテューヌが空から落ちて来てそれから…」

「そうだ、プルルーツとピーシエは!」

「プルルーツ!ピーシエ!居るなら返事してー!」

「これって、まさか…置いてけぼりにされたの……嘘でしょー!」

「プルルーツ!ピーシエー!ふざけてるだけでしょー!」

「今なら怒らないであげるからー!出てきなさい!」

続かない。

ネプ子さんが初代ネプテューヌ次元にログインしました。

「我が名はネプテューヌ。人気者にして最強の女神パープルハートの二つ名を持つ究極の存在」

「……うわー、恥ずかしい！ MAGES. やアインはよくこんなのを毎回出来るよね」
「やっぱりこういうのは私のキャラじゃないね。うん、やめやめ！」

「えっ、MAGES. とアインの説明した方がいい。……中二病！ 以上！」

「はーいということで、ネプ子さんは別次元に飛ばされちゃいました」

「もうねー、何度も別次元に飛ばされてネプ子さん疲れちゃったよ」

「まず、別次元に飛ばされたら、その世界に危機が訪れてて、それを解決しなくちゃいけないでしょ」

「その後は元の世界に戻るために沢山のシエアを集めなくちゃいけないしさー」

「ようやく元の次元に戻れても、山程ある事務仕事＋失ったシエアを取り戻すために働かなくちゃいけないし」

「やっとの思いで終わらせても休む暇もなく、次の別次元に飛ばされるんだよ」

「しかもほぼ毎回、いーすんとかのお説教つきだよ。酷くない」

「まあ前回飛ばされた世界では世界の危機的なことは訪れなかったけど」

説明しよう。私の前回飛ばされた世界は私の元いた世界にかなり似ている超次元で、同時に神次元も存在していたんだ。

「いやーとにかく楽しかったなー。R18アイランドで幼女体系を馬鹿にされてたブランをからかったり。コンパの寝姿の写真を携帯で撮ってたあいちゃんをからかったり。なんかおつきい私も来たりして……色んなことがあったなー」

「まあ、遊んでばかりだったからいーすんに凄く怒られちゃったんだけどね」

「因みに、別次元に飛ばされるのは久しぶりだろとかいうツツコミはなしだよ」

「さてと、そろそろいつもの探索を始めたいと思いまーす」

しばらく歩いていると見覚えのある人物を見つけた。

「おおー、あの後ろ姿はコンパだ！ コンパー！」

「はいですか？ ……ねぶねぶです！ こんにちはです」

「ヤッホー」

紹介しよう。この子はコンパ。

ほんわかしてて優しい看護師の学校に通ってる私のマイフレンドなのである。

まあ看護の腕はダメダメなんだけど、料理が得意で私の大好きな美味しいプリンを作ってくれるんだよ。

この作品ではあいちゃんを優遇しすぎて出番が全然貰えてないんだ。

「あれれ。でも確かねぶねぶはあいちゃんと一緒にクエストを受けてる最中じゃなかったですか？ もう終わったんです？」

「あー、そうなんだ。でも、その私は別人なんだ。実はねー」

……説明中……

「別次元のねぶねぶですか。別次元なんてあったんですね」

「そうなんだよ。信じられないかもしれないけど」

「信じるです。言われてみればいつものねぶねぶと雰囲気や服装が違うです」

「えーそうなの？」

「それに声も。私の知ってるねぶねぶの声はもっと若々しいです」

「こらー！ 信じてくれたのは嬉しいけど。滅多な事は言わないの！ 今だって十分に若々しい声だよ！」

初代から何年経つてると思ってるの。

それにおつきい私の声はこの次元の私の声に多分近いよ。うん。

本気を出せばあの頃の声だって出せるんだよ！ ……多分。

「私が別次元から来たことを分かって貰えたところで、今度はこの世界のことを聞きたいな」

「この世界のことですか」

「うん。ついでに私と一緒に旅をしてどんなことをしたのかとかもね」

「分かったです。一生懸命説明するです」

……説明中……

コンパの話を聞いてみて思ったんだけど……

なんかこの世界……殺伐とすぎじゃない。あれね、このゲームのコンセプトって美少女バカゲー系じゃなかったけ。

なに守護女神戦争って。なんで四女神でガチで戦ってたんの！

いや、私たちの世界でもシエアの奪い合いはしていたけど。バトルロワイヤルまではしてなかったよ。

なんか死人出てるし女神同士の仲凄く悪いし。メチャクチャだよ！

神界と下界で何？ 私そんな世界知らないよ。

そして浮遊大陸。この世界の4大陸は全て浮いてるらしい。

有名な某映画の空飛ぶ城じゃないんだから。

それにいーすんが世界を創生した秘書で、私たちの事を創生したらしい！

いやいや、それって神様じゃん！ いーすんってそんなに凄かったの！

私毎日怒らせてるんだけど、そのうち神罰とか受けることになるのかな。

さらに、マザコングが元守護女神でマザコングを元にして私たち四女神が創生された

だよ！

悲報！ マザコング、私のお母さんだった!?

私、序盤のチュートリアルボスとかおぼさんとかよんで馬鹿にしまくってたんだよ。

えー、あんなのがお母さんとか絶対はやだよー！ 虐待されそう。

情報が多いし、私の世界と違いすぎるし内容が衝撃的すぎて頭の理解が追いつかない

よ！

「ねぶねぶ。大丈夫ですか。さつきから、ずっと頭を抱えてるです」

「あーうん。ゴメンね。ちよつとコンパの話が衝撃的過ぎてね」

「要は封印されているいーすんを救うために、四大大陸の何処かにある鍵の欠片を探して

いて旅をして。なんかかんやあって、マザコングを倒してこの世界を救ったってことだね」

「はいです。最後に全ての大陸からモンスターさんを消して、ねぶねぶたち四女神さんは女神の力をいーすんさんに渡して、いーすんさんだけ神界に帰っていったです」

「そうなんだ、四女神さんが女神の力をいーすんさんにねー。……えー!!」

「はう!? 驚かさないで欲しいです」

「いやだつて! えっ、この世界の私女神じゃないの!」

「そうです。ねぶねぶたちは普通の少女として生きていく道を選んだんです」

「なにそれ。このゲームのタイトル超次元ゲームネプテューヌだよね。タイトル詐欺じゃん!」

「そんなことないです。女神の力を渡す前は変身しまくってたです」

女神の力をなくした私とか、ただの主人公で人気者の強くてかわいい美少女じゃん!

あーでも、おっきい私とか毎日楽しそうにしてるし、私も女神の力を失えば毎日ぐうたらできるかも。

うーん、でも女神の私になれないのはなんか嫌だな。

「まあ、女神の力を失った事はとりあえず置いといて……許せないのはあいちゃんだよ

！」

「あいちゃんですか？」

「そうだよ！ 私やネプギア、セガミンというものがあらながらベールの信者だと！」

「私たちとの関係は遊びだったの！ 絶対に許さない！ この世界のあいちゃんを私の信者にしてやんよ！」

「ねぶねぶ。どの女神様を信仰するかはその人の自由です。だいいちベールさんはもう女神さんじゃないです」

「そんなの関係ねえ！ ねつぶねぶにしてやんよ！」

後なんでフィナンシエがベールの信者なの！

フィナンシエってブランのメイドだよね。

私の世界のフィナンシエはブランやロムちゃんラムちゃんと凄く仲良いよ。

ベールの信者なのにルウィーのメイドをしてみるとかもう訳がわからないよ。

「別次元のねぶねぶはこの世界のねぶねぶより滅茶苦茶です」

「そんなことないよ。どの世界でも私は人気の主人公オブ主人公だよ！」

「それです。この世界のねぶねぶは正義の味方アールミみたいなことはしていましたが、人気者アールとか主人公アールとかかしくないです」

なんだ……と。私が主人公アールや人気者アールをしないでと。そんなんだか

ら、人気投票でノワールとかに負けちゃったんだよ。

それに正義の味方アピールって日本一ちゃんじゃないんだし。

正義の味方とか絶対にめんどくさいよ。

有名な仮面をつけたバイクに乗った人とか、スーパーな5人組とか毎回悪い奴らと戦ってて大変そうだよ。

「あれ……よく考えたらいーすんって神界にいるんだよね。どうやってコンタクトを取ればいいの?」

「いーすんさんにですか? それは……分からないです」

「いや、これってヤバくない! いーすんに会えないと私元の次元に戻れないよ」

「そうなんですか、それは大変です!」

「それなら、取り敢えずプラネテューヌ教会に行ってみるのはどうです」

「いいね。教会にだったら何かしらいーすんと連絡を取れる手段があるかもしれないね」

「そうと決まれば早速教会に行ってみよう! 案内よろしくコンパ」

「はい任せます」

この時の私は想像してなかった。

この後、こっちの世界の私やあいちゃんたちと知り合うことになったり。

REDの嫁探しを手伝ったり、5pbちゃんのアイカツを手伝うことになるなんて。

そして何故か4大陸にモンスターが出現するようになって、この世界の私とかと力を合わせて退治することになるなんて。

「それにしても、どの世界でもコンパは変わらないね」

「そうなんですか」

「うん。どの世界のコンパも私の大切な親友だよ」

「ねぶねぶ……」

「あつそうだ、子供の姿のコンパとあいちゃんが居た世界もあつたんだよ」

「子供の姿ですか」

「赤ちゃんから育てた世界もあつたんだよ。あいちゃんとピー子という子と一緒に。泣き出した時にはよくあやしてあげてたっけ」

「赤ちゃんです!? ど、どうして私のお世話をねぶねぶが」

「まあ、成り行きだよ。後他には……」

続かない。

ネプ子さんが聖剣エンド次元にログインしました。

「私ネプテューヌ。またの名を女神パープルハート。どう刮目した？ 刮目したよね？」

刮目したでしょ」

「なんか目が覚めたら別次元のバーチャフォレストに居ました。……以下略……」

「この次元は……なんか今まで飛ばされた次元の中で、一番私がいる超次元に近い気がするな」

「うーん、なんて言えばいいのかな？ まるで少し前の私の世界みたい。何だろうこの

実家のような安心感みたいな感覚は」

「まあ、いいや。……それじゃあ、いつもみたいに探索を始めるとしますか」

……

「それにしても、バーチャフォレストに飛ばされたのは、デングキコちゃんやファミ通ちゃんと仲良くなった世界と……あの世界以来か……」

しばらく森を彷徨っていると見覚えのある場所についた。

「ここは昔よくネプギアと遊んだ場所。そして……あの世界のネプギアと初めて出会った場所……」

説明は……あまりしたくないけど。

あの世界とはネプギアが女神を殺せば強くなる魔剣ゲハバーンを使って……犯罪神を倒した世界のことだよ。

これ以上、詳しくは話したくないかな。

「私が元の世界に戻る時にはネプギアとコンパが泣き出しちゃって……あいちゃんやいーすんも涙目で……」

「他の皆もそうだったけどあのケイやチカまで悲しそうな顔をしてたんだよ」

「あの状況で元の世界に帰ったのが正解だったのかな。もつと何かできたんじゃないかって未だに思うんだよね」

「四女神オンラインもあの世界からはログイン出来ないから、情報はいーすんから聞くしかないんだよね」

「元気でやってるらしいけど、本当なのかな……」

「あー、ヨメだ！」

「おっ、REDじゃん。ヤッホー」

紹介しよう。REDは「女の子は全員私の嫁」とか言ってるちよつとアレな子で、前回飛ばされた次元では嫁探しのお手伝いをしたんだ。

因みに、前回飛ばされた次元はとにかく酷いところだったんだよ。

殺伐としてて、キャラの性格が違って、設定が違って、ジャツドつて人が殺されてて、あいちやんがベールの信者で、四女神が女神じゃなくて、もうとにかくめちやくちやだったんだよ。

「ほんとにゆ。ねぶ子、お前こんな所で何してるにゆ」

「ぶち子も、ヤッホー！」

「ぶちこじやないにゆ！ ブロッコリーにゆ！ いつになったら覚えるにゆ」

この子はブロッコリーことぶちこ。ゲマって言う変な生き物に乗っている毒舌幼女なのである。

なんかいつもぶち子って呼んじゃうんだよねー。

「あれ、確かネプテューヌは他のヨメたちと大量発生したスライヌの討伐に行くんじゃないかったっけ？」

「サボりかにゆ。相変わらずいい加減な奴にゆ」

「ち、違うよ。私は2人が知ってる私じゃなくて」

「意味不明にゆ」

「実は私は……」

私は別次元から来た事を説明して、どうにか2人に納得してもらえた。

そして今度は2人にこの次元のことを聞いてみた。

「どうやらこの次元でも犯罪組織マジエコンヌが世界を支配しようと暗躍していて、あの世界みたいにゲハバーンを使う一歩手前まで来てたらしい。」

でも、ノワール達との戦闘の後にネプギアがゲハバーンを破壊したことでみんな冷静になることが出来た。

「四大陸のシエアクリスタルを1つにして、壊れたゲハバーンを再利用して、シエア・ブレイドを作成して。」

最終的にシエアブレイドで犯罪神を倒してめでたしめでたしだった。

「なんか、シエアブレイドのくだりとこの2人に加えて、鉄拳ちゃん、マベちゃん、サイバーコネクトツアーちゃんが一緒に戦ってくれた事以外は私の次元と全く同じ展開だったみたい。」

だからこの次元に来た時に懐かしい感じがしたんだね。

「あの時は本当にどうかしてたにゆ。もしあの時にネプギアがゲハバーンを壊してなかったら、とんでもないことになってたにゆ」

「だよなー。私が大切なヨメたちをやっちゃうところだったよ」

「そんなことがあったんだ。……なんか……シエアの力つて……凄いなだね」

4大陸のシエアを一つにして剣を作る……そんな選択肢もあったんだね。

全く思いつかなかったよ。

なんか2人の話を聞いてるとゲハバーンよりシエアブレイドの方が強い気が……いや流石にそれはないよね。

それにしても……この世界のことはあの世界のネプギアたちには口が裂けても絶対に言えないかな。

だって、こんな結末があつたなら仲間たちや信仰してくれてる人たちを信じないで、ゲハバーンを使ったあの世界のネプギアたちが馬鹿みたいじゃん。

この事を話したら、あの世界のネプギアたちはもう二度と立ち直れなくなる気がする。

もし……もしも私たちの世界が同じ立場になったらどうなったのかな？

この世界のネプギアみたいなことが出来たのかな？

「どうしたの難しい顔して」

「いつものお前らしくないにゅ」

「……いやー、この世界のネプギアが主人公し過ぎて、私の主人公の座が奪われないか心配してたんだよ」

「どう考えてもネプギアの方が主人公してたにゅ」

「だよなー特にゲハバーンを破壊した時のネプギアは凄過ぎたからね」

そうなんだよ。

なんかゲハバーンを壊した時に、「私の守りたかったゲーム業界は4大陸と4人の女神、そして女神候補生がいる世界で。国を滅ぼしたり、誰かの命を奪ってでしか救えない平和なんて誰も望んでない」って言ったんだって。

この世界のネプギアが立派過ぎて、お姉ちゃんそれを聞いて泣き出しちゃいそうだったよ。

やっぱり誰も死なないハッピーエンドが一番だよね。

それにゲハバーンに頼るより、仲間と信仰してくれる人のシェアの力で勝利する方が

いいに決まってるよ。

「お姉ちゃんとしては妹が成長して誇らしくて嬉しいんだけど……主人公としては複雑な気持ちなんだよね」

「呆れて物も言えないにゆ」

「まあ、ネプテューヌらしいじゃない」

「うん。2人のお陰でこの世界の事は大体分かったよ。ありがとね」

「アタシのヨメの為ならお安い御用なのだ」

「じゃあそろそろプラネテューヌ教会に行つて、いーすんに会いに行くとしますか。そうしないと始まらないよ」

「こんな所でくつちやべつてないで、始めからそうするべきだったにゆ」

「分かってないなー、ぷち子は。これもテンプレつて奴だよ」

「だからプロッコリーにゆ！ いい加減にしるにゆ！」

この時の私は想像もしてなかった。

まさかこの後この次元の私が神次元に飛ばされることになって、私が代わりにシエアを集めたり働くことになるなんて。

さらにギョウ界墓場でモンスターが大量発生して、そいつらを倒すために戦いまくる事になるなんて。

そしてもう一つ……まさかあんな事が起こるなんて……

「それにしても、この世界と私の世界での私とぶち子との出会い方がかなり違うんだよね」

「違うの？　どんなところが？」

「私の世界では別次元の神次元で、広報担当の人に恒例のDLCの追加キャラを召喚してっってお願ひしたら、ぶち子が召喚されてそれが始めての出会い」

「何その人凄い！」

「うんそうだよ。私のこんなキャラがいいって言う無茶振りにもちゃんと答えてくれて。鉄拳ちゃんとかサイバーコネクトツーチちゃんとかも召喚してくれたんだよ」

「アタシの注文に答えてくれるの！」

「ねえねえ、私にその人紹介してよ。その人がいればいっぱいヨメができちゃうよ！」

「本当にお前、はた迷惑なやつにゆ」

「そもそも、お前の世界で出会ったんじゃないのかにゆ」

「まあまあ、細かいことは気にしないの」

ネプ子さんがリバ1次元にログインしました。

「はいどうも。主人公で女神様のネプテューヌです」

「今日はなんと！」

「久しぶりに別次元のプラネテューヌに飛ばされてしまったみたいです！」

「さあ、この次元ではどんな事が起こるのか！ 早速、探査してみたいと思います」

「……配信サイトのノリで実況してみたけど、もう飽きちゃった」

「やっぱりいつも通りの私で探索しようかな」

「うーん。探索してみて思ったんだけど……なんかこの世界は、デンゲキコちゃんとファミ通ちゃんと呼び合ってた世界と」

「女神じゃなくなった私がいいた世界に、なんとなく似ている気がするな」

説明しよう。

女神じゃなくなった私がいいた世界はとにかく殺伐としていて、私の世界とは設定が色々違ったんだ。

「それに引き換え、この前飛ばされた世界は私の次元にそっくりだったな」

またまた、説明しよう。

この前飛ばされた世界とは、ゲハバーンを破壊してシエア・ブレイドって言う武器で犯罪神を倒した世界の事である。

「いやー、ギョウカイ墓場からモンスターが大量発生した時は本当に大変だったな」

「いつメンに加えて、私の世界にもいたオデコちゃんとかふらふらちゃんの幽霊が力を貸してくれたおかげでなんとか倒す事ができたんだよね」

「そう言えば、私の世界には初代コンパちゃんの幽霊もいたけど、あの世界にはいなかったな」

「なんでだろう?」

そんな事を考えながらプラネテニューヌを探索していると、前方に2人の見知った顔を見つけた。

「おお! あのと人はマベちゃん和鉄拳ちゃんだ!」

「おい、その忍者と格闘家のお二人さーん! 止まってー!」

「忍者と格闘家?」

「それって私たちの事だよな」

「……あー、ねぶちゃん！ 久しぶり」

「マベちゃん、久しぶりだね」

紹介しよう。

この子はマーベラスAQLことマベちゃん。

私のお友達で元気な爆乳忍びなのである。

可愛くて胸が大きいなんて、さすが忍者汚い。

「ネプテューヌさん、こんにちは」

「鉄拳ちゃんもヤツホー」

またまた、紹介しよう。

この子もお友達の鉄拳ちゃん。

ドMで気弱だけどもすごい強い、格闘少女なのである。

知り合いに巨大な熊さんがいるんだよ。

「あれでも確かねぶちゃんは、イストワールさんに用事があるからって呼ばれてなかったっけ？」

「その用事はもう終わったの？」

「余ってるシエアを使うみたいなのを言っていたけど、何があつたの？」

「あーはいはい、テンプレね。実は……」

「あーはいはい、テンプレね。実は……」

「そうなんだ、貴方は別次元から来たねぷちゃんだったんだね」

「そう言えば最近ネプテューヌさんはいろんな次元に飛ばされてるって、アイエフさん達が言ってたっけ」

「え！　なんで2人ともそんなにすんなり受け入れてくれてるの」

「私としてはいいことだけど、何か調子狂うな」

「実は私たちも別次元からこの次元に来たんだ」

「だから、ネプテューヌさんと私たちは知り合いだと思うよ」

「そうなの！　通りで」

いやでも、2人が絶対に私の知ってる2人だとは限らないし。

「そうだ！　ここは以前も使ったあれをやりますか」

「あれ？　一体何をするつもりなの？」

「えーと、私と2人の出会ってどんなのだっけ」

「ねぷちゃんとの？　私はイストワールさんから受けた依頼の最中で、広報担当のイザワさんに召喚されたのが初めての出会いだったよね」

「私はネプテューヌさんをお願いを先読みしたイザワさんに、既に召喚されていた状態

で出会ったのが初めての出会いだったね」

「あの時は芸人の鉄拳さんの正体とか言われてびっくりしちゃったよ」

「いやー、その節はごめんねー」

「でも今のを聞いて確信したよ。2人は間違いなく、私の知っているマベちゃんと鉄拳ちゃんだね！」

「リアルで会うのはすごく久しぶりだね！ 元気だった」

「うん、私はいつでも元気いっぱいだよ」

「四女神オンラインではたまに会ってたね」

「そうだったね。……あれ、そもそも何で2人はこの次元にいるの？」

「まあ、色々あってね」

「私たちだけじゃなくて、サイバーコネクトツアーちゃんとかファルコムちゃんとかもいるんだよ」

「MAGES. とブロッコリーも」

「そうなの！ 神次元のメーカーキャラ大集合だね」

「私たち別に神次元出身じゃないよ。ファルコムちゃん以外は」

「みんな、イザワさんに召喚されたからね」

「細かいことは気にしない。それより、この次元ではどんな事があったのか教えて欲しい」

いな」

「お安いご用意だよ」

「えーと、まず何から話そうかな？ 私たちも途中から仲間になったから、全部を把握してるわけじゃないんだけど」

「へえー、この世界ではそんな事があつたんだね」

「マザコングが元人間で悪い女神を倒す為の4勇者パーティーの一員で、勇者パーティーに討伐されて女神が改心した後に、私たち四女神といーすんが産まれたと」

「うん。でも討伐した時に悪影響を受けて、私たちの知ってるマジエコンヌになっちゃったみたい」

「それで、有名な某ピンクボールの得意技、コピー能力で暗躍して世界を滅茶苦茶にしたと」

うーん前々回の世界とは冒険の流れは同じだけど、設定が色々違うね。

日本一やガストが居なくて、ジエツトも居なくなってるし。らんらんとかいう訳の分からぬペットはいるし。

シアンやガナツシユはいるみたいだけど、まさかあの巨乳好きの兄弟が味方になって

るとは。

しかも、ブランに使えてるとか。まあ案の定裏切って、ベールの信者になったみたいだけど。

でも女神の仲が悪くないのも、ほのぼのとしてるのもマザコングが私のお母さんじゃないのは良かったよ。

ただ、あいちゃんがベールの信者のままなのは解せません。フィナンシエは信者じゃなくなったのに。

「最後はネプテューヌさんがマジエコンヌさんを助ける為に1対1で戦って」

「マザコングを元に戻して助けたと。いやー、この世界の私も随分と主人公してるね」

前々回の世界では改心するように言ってもダメだったみたいだし、おばさんとはいえ居なくなるのは寂しいからね。

「二年間くらい帰ってこなかったから心配したんだよ」

「まあ、ネプテューヌさんならきつと無事に戻ってきてくれるとは思ってたけどね」

「ごめんね。真エンディングで私がしばらく居なくなるのはテンプレの1つみたいなのだから」

「主人公の宿命ってやつかな。でも主人公補正があるから問題ないんだよ」

「まあおばさんと1年間ずっと一緒ってのは、流石のねぶ子さんでもちよつと遠慮した

いけど」

「しかし改心したマザコング、一度見てみたいな」

「いやでも、私たちが冒険した神次元のナスコンヌと同じ感じかな」

「あのおばさんナスばっかり育ててるから、あんまり会いたくないんだよね」

「ところがそうでもないよ。見た目が凄く変わってるよ」

「性格は余り変わってないけど、美人になってて。初めて会ったときにはびっくりしちゃった」

「美人！ アレが!? もう、冗談言わないで」

「本当だよ。一度会ってみれば分かるって！」

「多分プラネテューヌ協会に居ると思うから、今からでも会いに行こう」

「おばさんに会いに行くのは正直気が引けるけど、協会に行くのはいいね」

「それじゃあ、教会に行こうか」

「この時の私は想像してなかった。

協会で会ったマザコングのピフォーアフターに度肝を抜かれることになるなんて。

そして丁度新しく誕生した、ネプギアにこの世界の私より懐かれた事で、この世界の

私と決闘する事になるなんて。

そしてもう一つ、次に飛ばされる世界でビフォーアフターしたマザコングのそっくりさんに会う事になるなんて。

「美人なおばさんかー。まあ、私たち四女神のお母さんだった世界もあったし。ワンチャンあるのかな？」

「お母さん。あのマジエコンヌが!？」

「それは……嫌だね」

「そうだよ。アレだよアレ！ それを聞いた時の私の気持ちが分かる」

「ノワール、ブラン、ベールも顔顰めてたし」

「当然、ネプギアたち女神候補生も」

「その時のみんなの顔が容易に想像できるよ」

「あのおばさんもなんなんだろうね。事あるごとに女神を目の敵にして。ほんと嫌になっちゃうよ」

続かない。

番外編

ネプ子さんが番外編次元にログインしました。

セハガール次元

隠れセハガール、ネプテューヌ？

「セハガールかー。…なんだろう…君たちを見てるとなーんか親近感が湧くんだよなー」

「別次元の私もそうなんだ。実は私も前からそう感じてたんだよ」

「バイクの私もそうなんだ！…うーん、もしかしたらだけど。…私もセハガールの一人だったりして」

「いや。君みたいなポンコツがセハガールとかあり得ないから」

「確かに、それはお断りだな」

「ネプテューヌじゃあねえ」

「…要らない…」

「ネプギアさんやうずめさんならまだしも、ネプテューヌさんは…ちよつと…」

「ううー、あいちゃーん。みんなが冷たいよー」

「日頃の行いのせいよ。これに懲りたら、少しは悔い改めなさい」
「あいちゃんまで！」

ネプU次元

ブランちゃんいじり。

「あー、ブランちゃんだー！」

「ああん！ネプテューヌ、てめえ、いきなり何を！」

「おわあー！お、落ち着いてくださいブランさん！どうどう」

「実はこのネプテューヌさんはこれこれこういう事で……」

「別次元のネプテューヌだと。だとしたらどうしてその事を」

「デンゲキコちゃんとファミ通ちゃんが書いた雑誌を見たからだよ。いやー、まさかあのブランがかわいい子アピールをするとはねー」

「うう。…あれはその…いつときの気の迷いで」

「私の次元のブランに話したらどんな反応するんだろ。…ベールやロムちゃんとラムちゃんに話すのもおもしろそうだよねー、ブランちゃん」

「うがああー!!…ふざけんなよ、ナメヤがつて!…上等だ!てめえのその記憶が吹き飛

ぶまでゴコゴコにしてやらあ！」

「う、うわあー！ 暴れないでください！」

「な、なんで私たちがこんな事をー！」

「離しやがれ!!」

激ノワ次元

あいーんとアイン。

「私、アイドル兼武将の増島愛です。よろしくおねがいます。別次元のネプテューヌ様」

「おお、そうなんだ。よろしくね、あいーん」

「あいーん。：うう、別次元のネプテューヌ様もその芸人みたいなあだ名で呼ぶんですね」

「えー、いいじゃん。かわいいと思うよ、あいーん」

「全然良くないですよ。だいたい、私よりアインさんの方がそのあだ名で呼ばれるべきだと思います」

「アイン？ それって誰？」

「愚かな、私は世界に選ばれた剣聖。その様な低俗な名が似合うはずなからう」

「ねぷ！何この子!? あいちゃんなんて目じゃない、MAGES. 並みかそれ以上の中二病キキャラだよ！」

「ちよ、これはキャラとかじゃないし本当の姿だし！」

「素が出てますよアインさん」

PP次元

敏腕プロデューサー兼、一級フラグ建築士。

「君が噂のプロデューサーだね。やつほー、私は……」

「別次元のネプテューヌだってー! ……いやでも、ネプテューヌが僕の世界に来たこともあったし別次元のネプテューヌが居てもおかしくはないか?」

「えつ、何それ。この次元の私、君の世界に行った事があるの!」

「うん。なんか元の世界で目覚めたら何食わぬ顔で居たんだ…」

「おお、流石私だね! ……でも、君も中々凄いプロデューサーだね。いきなりこの世界に連れてこられて、私たち四女神をプロデューズして、最終的にアイドルとして大成功を収めさせたんだから」

「いやそれほどでもないよ。みんな元が良かったし、どちらかと言えば僕がみんなに育てられたし」

「そして私たちに好かれてハーレムも築いたんだよね、このすけこまし！」「ぶっ！ちよつと、そんな人聞きの悪い事言わないでくれるかな！」

「否定しないって事はすけこましなのは認めてるんだね。この、女の敵！天然ジゴロ！一級フラグ建築士！女たらし！」

「ご、誤解だよ！…だから、それ以上、悪評を広げるのはやめてくれー！」

激ブラ次元

すっかり忘れていたゾンビハンターピオ。

「ゾンビかー。そう言えばゾンビを殺すのを専門にしてるピオっていう武将が別次元に居たっけなー」

「武将？なんだそりや？そいつは一体なにものなんだ？」

「ああ、そう言えば話してなかったかもね。でも、これショートショートだから詳しい説明は省略ね」

「なるほど。つまり…別次元にゾンビハンターがいたということが言いたかったのかし

らっ？」

「うんそうそう。本当は本編で名前だけでも出す予定だったんだけど…作者がうっかりと忘れてたんだよねー」

「ちよつと。そういうのは言わないお約束でしょ」

四女神オンライン次元

女神パープルハート様。

「あらネプテューヌじゃない、久しぶりね」

「ねぶ！女神化した私…：：と言うことは…貴方が女神様だね！」

「ええ、そうだけど。何をそんなに驚いているのかしら？知らない仲ではないでしょ。まるで初対面で会ったかのような反応をして」

「や、やっぱりそうなんだ。…うん、やっぱり女神化した私って、スタイリッシュでクールな美人で凄くいいね」

「一体どうしたの？なんだか今日の貴方は変よ？」

「えーと、この私はNPCだから別次元とか言っても理解出来ないんだよね。そうだな…遠い所から来た女神様が知ってる私とは別の私って言えばいいのかな？」

「私が知っているのとは別のネプテューヌ?…そう言えば、以前ネプテューヌが自分より大きな自分が居ると話してたけどそれが貴方かしら?」

「あー、大つきい私とはまた違うんだよなー。…まあ、私と女神様は知り合う事ができたんだし、細かいことは気にしない気にしない」

「細かいことではない気がするのだけど。…貴方がそう言うのなら気にしないでかわ」

「まあ何はともあれとりあえず…これからよろしくね、女神様!」

「ええ、こちらこそよろしく…そうね、別のネプテューヌとも呼べばいいかしら?」

「うーん…あんまりよくはないんだけど。…まあ、それでいいよ」

支配者エンド次元

いーすんの気遣い。

「たっだいまー、いーすん!」

「ネプテューヌさん、お帰りなさい。…事情はあちらの世界の私から聞きました。…本当にお疲れ様でした」

「うん。流石の私と言えども…今回ばかりはね。…身体的にも精神的にも大変だった

「よ」

「心中お察しします」

「ねえ、いーすん。あの世界の事はネプギアには」

「話せません。…話せるはずありません」

「まあ、そうだよね」

「今回の次元の事は他の女神や教祖の方々にのみ話すことを検討しています」

「うん、それがいいと思うよ。…はあー、なんだかあつちの世界ではネプギアを甘やかしてばかりだったから…今は無償にネプギアに甘えたい気分だよ」

「本当でしたら今すぐにも働いて貰いたいですけど、今回は事情が事情なので。しばらくの間はネプテューヌさんの好きにして貰って構いません」

「本当！ やったー！ありがとうございます、いーすん！」

ネプ子さんが番外編次元にログインしました2

夢の合体スペシャル次元

ゲームギア

「ゲームギアってさ……他のセハガール3人とはなんか違うよね」

「当然。…私は携帯ゲーム機。他の3人は家庭用ゲーム機」

「いや、そうじゃなくて……まあはつきり言うなら……地味とか影が薄いとでも言うのかな？」

「…そう…その通り…私なんて所詮…数合わせで選ばれた存在」

「セハガールで有名なのは…私以外の3人」

「えっ！ いやいや、今のはそう言う意味で言ったんじゃないよ！」

「ネプギアがいたから選ばれただけで…本来なら私より人気なマスターシステムかセガ・マークIIIのどちらかが選ばれていた」

「私が1番有名なところは…3時間しか起動できない燃費の悪さ…」

「えーと…落ち着こう…ね」

「う……うわああああ——」

「暴れ出した!! あいちゃーん。せがみーん。助けてー!」

ネプU次元

服が破ける件について

「へー、この世界では一定以上の攻撃を受けると服が破けちゃうんだ」

「はい、そうなんですよ。いやー、それに關しては正直参りましたよー」

「うん、そうだね。活躍すれば服が破けないからって叩かれたり。服が破けたら「結婚してくれ」とか「子供の名前を考えたよ」とか言われたりもしたね」

「ええ、ロムさんとラムさんにもそれを言っていましたからね。正直、ドン引きしました」

「えー、それは確かにドン引きだね。うん、私は脱げないように気をつけないとね」

悲報、別次元のネプテューヌ批判される。

激ノワ次元

そして伝説のハンターへ

「ネプテューヌ！ ネプテューヌ！ 暇ならひと狩り行こうよ！」

「あつ、モルー！ いいよー…つて、遊びに行こうみたいなノリで、何とんでもないこと言ってるの！」

「危なくOKしちゃいそうだったよ」

「えー、いいじゃん。行こうよ行こうよー！」

「あー、ネプテューヌ様だ！ ネプテューヌ様、今から僕と一緒に伝説的なドラゴンを倒す冒険に行こう！」

「ドラゴンを倒す冒険。いや、ちょっと遠慮したいかな」

「むー、先に誘ったのは私だよ。ネプテューヌは私と一緒に金ピカのすつごく珍しいドラゴンを狩猟するんだぞ！」

「僕たちが倒すのだから5本の首を持った伝説的なものすつごーいドラゴンだよ！」

「いや、私そんな強そうなドラゴンと戦いたくないんだけど」

「5本の首を持ったドラゴン！ すごーい、私も狩りたい！」

「ドラゴンのことなら私の世界のファルコムに」

「僕も金ピカの伝説的なドラゴンを倒してみたい！」

「つて、あの一、聞いてますかー」

「決めた！ 私とエステルとネプテューヌの3人で、片っ端からドラゴンを狩りまくろう」

「おー、伝説的なアイデアだね！僕たちの伝説的な冒険の始まりだね」

この後滅茶苦茶ドラゴン狩った。

激ノワ次元2

早口言葉

「ねえねえ、リツド、プーナ」

「ん？ 何か用か？」

「何でしょ」

「なまむぎ、なまごめ、なまたまごって言うてみてくれない」

「お安い御用だ。なま「当然早口で」むう…なまむぎゆ、なまごむ、なみゆたむぎよ」

「ありがとう。じゃあ次はプーナ」

「早口は苦手なんですけど、精一杯頑張りますよ」

「なまむぎ…なまごめ…なまたまご…どうですか？完璧ですね」

「おい、今のは遅すぎないか！ 私だってそれぐらいのスピードなら言えりゆぞで」

「うん2人とも想像通り、期待を裏切らないね」

あかまきぎやい、あおまきがぎ、ぎまきがぎ。

激ブラ次元

次元の破壊者ネプテューヌ。

様々な次元に飛ばされるネプテューヌ。

いくつもの次元を巡りその瞳に何を見る。

「ようやく全てのハチマジーンを倒せた。これで全ての次元は救われ…」

「それは違うよ…」

「なっ、誰!？」

「ハチマジーンは次元の融合を加速させていただけで。本当の原因はあなたなんだよ」

「」

「私が原因…一体何を言っているの？ そもそも、あなた何者?！」

「えへへ。私はね、プルルート。またの名を、アイリスハート」

「アイリスハート…まさかあなたは女神！」

「へんしくん。…さあ覚悟はいいかしら」

「覚悟、一体どういう意味かしら？」

「そのままの意味よ。初めて出会った時に言ったはずよ。あなたが別次元に飛ばされる度に、全次元に歪みが生じてしまうと」

「貴方はあの時の！」

「もうあなたを倒さなければ全次元はやがて消滅してしまう」

「だから…今から私を含めた女神全員であなたを倒すわよ」

「そんな」

「あつはははー、覚悟はいいかしら？」

「これも次元を救うため、悪く思わないで下さいまし」

「ぼっこぼこにしてやるんだから」

「全次元を救うために、うずめ…頑張っちゃうよー」

「逃げ場なんてありませんよ」

「頑張る（ぐっ！）」

「情け容赦なんてしてあげないんだから！」

「ごめんね、お姉ちゃん」

「私たち全員が相手なら、別次元の私といえども勝ち目はないわよ」

「徹底的にブチのめしてやる、覚悟しやがれ！」

「結局、こうなる定めだったの……刮目せよ」

「いいわ、次世代の女神の力見せてあげる。どこからでもかかって来なさい！」

———END———

「素晴らしい完成度だったわ。我ながら自分の才能が恐ろしい」

「えー、何この打ち切り感丸出しの終わり方」

「最初は面白そうだったんだがなあ」

「はい、なんだか最終的に滅茶苦茶になってしまいましたね」

「最後の戦いの場面、私たちにも出番欲しかったですね」

おのれネプテューヌ!!

四女神オンライン次元

チーターがチーターになってさらにチーターになった

「へー、君たちがベールが話してたチートを使ってチーターになった2人なんだね」

「いやー、最初にその話を聞いた時はまるで意味が分からなかったよ」

「うっ…その事はあまり触れてくれないで欲しいです」

「仕方ないにや。全て本当のことにや」

「そもそもどうせ私たちなんて所詮、それだけの一発屋みたいなものにや」

「もうこの先出番なんてあるわけがないにや」

「悲しいことを言わないで、君には僕がついている」

「キリア……」

「姫……」

「……えー、なにこの茶番」

……プーケちゃんいまだに出番なし。

アニメ次元

序盤のチュートリアルボス、マジエコノス

「へー、この世界ではそんなことがあったんだね」

「そうなんだよ。いやーその中でも特にマザコングがね…しつこいのなんのつて」

「あのおばさんが私たちを倒す寸前まで追い詰めるくらい、悪役ムーブしてたなんて想像できないな」

「いやでも私も物語の序盤の方では、おばさんに為すすべもなく負けそうになった時もあつたっけ」

「まあ、その時は大抵女神になれない状態だったけど」

「女神に変更さえできれば、ぼっこぼこにしてやってたな」

「おばさんはやる事が汚いからね。いくら私たち女神にタイマンでは勝てないからつて」

「そうそう。まあ、マザコングは序盤のかませ犬的存在だからね」

「うんうん。チュートリアルボスの役割だよな。下手したらネズミと同レベルぐらいだよな」

誰が序盤のチュートリアルボスか！

支配者エンド次元

シリアスプレイヤーねぶねぶ？

「なるほど、久しぶりに会いたいわって連絡があつたから来たけど。そう言う事だつたのね」

「いいわ、私もこの世界を救うために力を貸すわよ。今の世界にはいろいろ思うところはあるから」

「私もです！ ギアちゃんがまた私たちを頼ってくれて嬉しいです」

「皆さん…ありがとうございます」

「ネプギアさん…ここ最近の貴方は常に思い詰めた顔をしていて心配でしたが。今のネプギアさんとはとてもいい顔をしています」

「いーすんさん。ご心配をおかけしました」

「えーと、実は皆さんにもう一つだけ、話しておきたい事があります」

「何かしら？」

「お話したいこと、一体なんですか？」

「何でしょう？」

「口で説明するより、実際に会って貰う方がいいと思います。その、驚かない……のは無理かもしれません」

「合わせたい人。どなたです?」

「主人公オブ主人公ネプ子さん…参上! …刮目せよ! …なーんてね」

「……」

「ノーリアクション!? もーノリ悪いなー。ここは「女神の力見せてあげる」とか「最初からクライマックスだぜ」とか返すところでしょう!」

「ネプ子!」「ネプテューヌさん!」「ねぶねぶ!」

「いきなり出てきてびっくりした? いやー、ごめんね」

「実は私、君たちの知ってるねぶ子さんじゃなくて別次元の…」

「ねぶねぶううう——!!」

「ねぶ! ちよ、コンパまだ説明の途中」

「ねぶ子…あなた…:悪ふざけも大概にしなさい! ネプギアが…コンパが…私が…どれだけ悲しんだと思ってるのよ!!」

「そうです! 私たちにあんな事を言った手前、気まずかったのは分かりますが。生きていたのですしたらちゃん報告してください!!」

「コンパ…苦しい、苦しいよ! あいちゃんもいーすんも頭と首揺らさないで—!」

「み、みなさん…落ち着いてください!」

「ネプギアー、助けてー」

そのシリアスをぶち壊す！

ネプ子さんがNGシーン次元にログインしました。

夢の合体スペシャル次元

「……………こんな時は、周りの人に聞いて回るのが物語の基本だね。おい、そのバイクに乗ってる人ー！ 止まっ……………通り過ぎちゃった……………」

「えー……………なんか見た感じあいちゃんぽかったのに……………私これからどうすればいいの？」

ねぷねぷに気づかずあいちゃんが通り過ぎてしまったのでNG

ネプU次元

「おやおや、ネプテューヌさん。何処に行くつもりですか？」

「困るなー、まだインタビュウができてないのに」

「ねぷ！ え、えーと……………それはですね……………そ、そういえば……………デスゲームの中に閉じ込められる某作品と召喚獣を召喚できる某作品ってどっちが人気なんだろうなー？」

「ふふん。何を言うかと思えば……………そんなのデスゲームの中に閉じ込められる某作品に決まってるじゃないですか」

「いやいや、召喚獣を召喚できる某作品に決まっていますよ」

「なんですと！ あの作品に私の推す作品のような事細かな設定があるんですか！ ありませんか！」

「そつちの作品こそ、私の推す作品のような天才的なギャグシーンがあるのかな？」

「何を！ 売り上げでは圧倒的にこちらが勝つてますから！ アニメも現時点で第3期までやって全て2クールですよ2クール！ そちらの作品は何期で何クールでしたか？」

「くっ……アニメ化したのはこつちの方が早いですよ」

「それがどうしました！ 私が推す作品は映画化もしましたしゲームも何作も出てますし、グッズも大量に出てますよ！ しかも今だに連載中！ まだまだ、未来がありますよ。一方そちらの作品はどうですか？」

「多ければ良いと言うわけではないんじゃないかな。……そういえば、デンゲキ子さんが推す作品の主人公はネット上でイ○○○とか馬鹿にされていて、嫌われてるよね。……その点、私の推す作品の主人公は作品内でも読者にも好かれていますよ」

「ぐっ、痛いところを……」

「それに貴方の推す主人公は所詮、ゲームの世界で強いだけの陰キャラ。一方、私の推す主人公はおバカだけど運動抜群の陽キャラ。どちらの主人公が良いかは一目瞭然だよ

ね」

「何ですって!」

「何ですか!」

「今の内に……やったー、逃げ切れたよー!」

ねぶねぶが逃げ切ってしまったのでNG

激ノワ次元

「くらえー、ジャンピング」

「正気なの! ……あーもう。秘書官、貴方は下がってなさい。……レイシーズ」

「アーツ!」「ダンス!」

ネプテューヌの技とノワールの技が激突した!

「流石は偽ノワ。偽物でも一定の強さは持っているみたいだね」

「私は本物よ! いい加減にしなさい」

「はいはい、偽物に限って私は本物だーとか言うんだよね。テンプレ乙」

「あーもう、めんどくさいわね! 少し痛い目に遭わないと分らないみたいね、ヴォル

ケーノ・ダイブ!」

「負けないよ！ サンダー・クラッシュユ！」

「えーと、これってどういう状況なの？ ……どうして私のそっくりさんとノワールが戦ってるの？」

「ネプテューヌ様が2人！ 一体何がどうなってるんだ!？」

ねぷねぷとノワールがバトルを始めてしまったためNG

ネプP次元

「じゃあね、別次元のお姉ちゃん」

「本当にすみません、お姉ちゃんたちのライブが終わったらすぐに戻って来ますので」

「ばいばい」

「まったねー」

「あ、あれねー、おかしいなー。 ……普通だったらここは一緒に行くように誘われるパターンじゃあないのかな？」

ねぷねぷが置いてけぼりにされてしまったのでNG

ネプU次元

「ねえねえ、こっちの世界で何か面白エピソードとかあったら、教えて欲しいなー」

「それならとっても面白いのがあるよ。その名も、魔法少女アイドル☆マジカル☆ノワリン、さらにマジカル☆ブラリンー！」

「あはははー、何それ！ 名前を聞いただけなのに、笑いが止まらないよー」

「いやー、ノワールが廃校を阻止するために痛い衣装で歌う動画をアップしたんだよ。そしたらその動画は案の定炎上」

「あー、なんかその場面が容易に想像できるよ」

「でもロムちゃんラムちゃんみたいな低学年の子にはうけたみたいで、その子たちの前でもう一度歌う事になってさ。……色々あつてブランまで痛い衣装でノワールと一緒にデュエットしたんだ」

「それがマジカル☆ノワリンとマジカル☆ブラリンだね。ノワールならまだしも、まさかブランまで痛い衣装で歌うなんて」

「あれは傑作だったよ。なんかラムちゃんが全てを悟ったような目をしててさあ。それがやけに印象に残ってるよ」

「そんな事があつたんだね。いやー、実は自分のことを「ブランちゃんです♡」とか言つて可愛い子アピールしてた別次元のブランが居たんだよ」

「ぶ、ブランちゃんって……あのブランが！」

「私の次元のブランに話した時の反応も、すつつごく面白かったんだよ」

「おい、テメエら。そんな大声出して……聞こえてないとも思ってたのか！」

悪口がブランにばれてしまったためNG。

四女神オンライン次元

「ぬ、あれはネプテューヌか」

「ホントだつちゆ。こんな所で一体何してるつちゆ？」

「ネプテューヌ様とベールお姉様にゃ！」

「こんな所で出会うとは奇遇ですね」

「本当だ！ ネプテューヌとベールだ！」

「ノワールさんは居ないんですか？」

「こいつは運がいいね。ちょうどクエストに挑戦するためのメンバーが後2人程、必要だったんだよ」

「運命というヤツかもしれないな」

「おお！ 今までこの作品で出番がなくて、これからも出番がないであろうキャラたち

がここぞとばかり登場してる」

「そうですわね。……とは言え、この先本編でコンパさんやうずめの出番があるとは限りませんわ」

「そして、私の妹プーケちゃんの出番は一体いつ来ますの!」

本当はこれに本編で出た4人+プーケちゃんを加えて終わりにする予定でした。

支配者エンド次元

「お姉ちゃん……私もう……ダメ。……限界なの」

「限界?」

「もう、お姉ちゃんがいけない生活なんて耐えられないの!」

「もつとお姉ちゃんと遊びたかった! お姉ちゃんに甘えたかった! お姉ちゃんのお世話をしたかった! ……いつまでも……お姉ちゃんやみんなと一緒に居たかった……」

「ネプギア。凄く気持ちは分かるよ……でも……」

「だから、オネエチャンニハズツト、ワタシトイツシヨニイテモラウ……」

「ねぶ!?! ネプギア何言って」

ガン!!

「ネプ……ギア……」

「これからずっと、ず——つと……いつまでも一緒に居ようね……お姉ちゃん……」
ねぷねぷが監禁されてしまうのでNG。

……ですがこれはこれでアリでは。

アニメ次元

「ねえ、今から2人に質問したいことがあるんだけど」

「聞きたいこと、なーに？」

「くいず！ びい、くいずとくいだよ！」

「えーと……2人は七賢人って知ってる？」

「ほえ、けんちん汁？ なーにそれ？」

「何それ、おいしいの！」

「違う違う、七賢人だよ！ ほら居たじゃん、レイとか。おばさんとか。ねずみとか。オ

カマのロボットとか」

「えーと後は……そうだ、やかましい幼女好きの幼女とか。リアル顔のおじさんとか。

暑苦しいロボットとか」

「うーん、どうだったかな。なんか、知ってる人が居るようなく、居ないようなく」

「ぴい、あつたことあるきがする！ たぶん！」

「えー、何その煮えきらない答え」

「あれれ、もしかしなくても質問する内容間違えた？」

最初はこれで行く予定でした。

初代ネプテューヌ次元

「おー、あの後ろ姿はノワールだ！ おーいノワール！」

「ネプテューヌ。何か用かしら」

「何そのそつけない態度！ もう、そんな態度ばかり取ってるからぼっちなんだよ」

「何ですって！ 貴方、よくも馬鹿にしたわね！」

「ねぷ！ あれ、何でそんなにマジになってるの！」

「こんなのしよっちゆう言ってるでしょ。私とノワールの仲間だから!？」

「貴方と仲良くなったつもりはないわ！ あの時にちよつと共闘したからって勘違いしないで」

「えー！ もしかしてこの世界って私たちの仲が悪いの！ ごめん！ 私実は、別次元の私で！」

「適当な事を言っても誤魔化されないわ。さあ、覚悟は出来てるかしら！」
ガチバトルになつてしまうのでNG。

聖剣エンド次元

「どうしてもできないと言うなら、私たちがやるわ。その剣を渡しなさい！」

「やめてください。な、なんでこんな事……こんな剣が……こんな剣があるから！」

「わあー！どいて、どいて——！」

「へっ!?」「のわあ——！」

「痛たたた。いやー、あの高さから落ちても大した怪我がないなんて流石私だね！」

「……あれ、ネプギア！ 私や他のみんなも！」

「いやー、こんな最速でみんなに会えたのは初めてだよ」

「……つて、ネプギア！それって、まさかゲハバーン!? だめだめだめー！」

「ネプギア！ そんな物すぐにポイしなさい！ 別次元に飛ばされまくった最強のお姉ちゃん力が力になるからー!!」

「へっ、いや私、壊すつもりで……」

「あの……下にお姉ちゃんが……」

この後ねぶねぶが力を貸して犯罪神を倒してしまい、シエアブレイドが生まれない為
NG。

リバー次元

「ネプテューヌ かこんなところで何をしている？」

「えっ、もしかしなくても、キミは私の知り合い」

「いやー、こんなに早くこの世界の新キャラに会えるなんて流石私。主人公の鏡だね」
「相変わらず訳の分からない事を」

「実は私は別次元から来たネプ子さんだね。良ければキミの名前を教えて欲しいな」

「そうだったのか。良からう。我が名はマジエコンヌだ」

「あーそう、マジエコンヌちゃんね」

「マジエコンヌ…マジエコンヌ……」

「えー……!!!キミっておばさんなのー……!!!」

「誰がおばさんだ！」

最初はこれで行くつもりでした。

劇場版ネプテューヌ予告

ゲームギョウ界を襲う、かつてない危機！

圧倒的な強さを誇るネプテューヌシリーズの隠しボス、デルフィナス。

作者が数あるネプテューヌ シリーズの作品内で、一度しか勝てたことのない最強の化け物!!

そいつが大量のモンスターを率いてゲームギョウ界に襲来してきた！

「そんな……女神化した私たちがまるで歯が立たないなんて」

「クソが、なんて強さだよー！」

大量のモンスターに加え、レガシー、絶対神の下僕、セイントホエールなどなど、強力なモンスターたちを相手に追い詰められいくネプテューヌたち。

「これはかなりまずい状況ですよ」

「……使うしかないと言うの……あの魔剣を……」

……そんな絶対絶命の危機に立ち上がる、かつて共に戦った仲間たち。

「絶対絶命の危機に、颯爽と正義のヒーロー参上！」

「どうして私がこんな状況で真っ先に駆けつけなかったと思う？
……それはね、集めてたからだよ……アタシと一緒に戦ってくれる仲間たちをね！」

今、ゲームギョウ界の命運をかけた戦いが始まる！

「がすとくんの絵描き歌ですの」

「ゲームギョウ界の全てのヨメはアタシが守るよ」

「響け、勇気の音色」

「私の弾幕を躲せるかしら」

「ドラゴンスレイヤーの名にかけて、お前たちを倒す」

「ゆくぞ！ 円卓の騎士たちよ、我に力を！」

「ゴッドイーターは……絶対に倒れるわけにはいかないんです！」

「世に鬼あれば、鬼を断つ。世に悪あれば、悪を断つ。剣のことわり……ここにあり」
「ネプギャー」

さらに次元を超えて駆けてくれるかつて共に冒険をした仲間たち。

「ねぶちやくん。助けにきたよ」

「ぴいはものすごく強いよ」

「貴様ら程度の有象無象では、この狂気の魔女MEGESの相手は務まらない」

「さーて、まず最初に倒すのはだ・れ・に・し・よ・う・か・な」

「ねぶ子……仕方ないから助けてやるにゆ」

「お前らは私の大切な仲間を傷つけた。絶対に、許さない!!」

「八葉一刀流の極意。たつぷりと見せてあげるよ」

「そんな攻撃、痛くも気持ち良くもないよ」

「親戚のコンパちゃんの方まで頑張っちゃおうよ!」

「ここは俺たちに任せてくれ、ねぶつち」

「微力ながら、俺たちも力を貸すよ」

「いくよ、みんな！」

「ああ、こちらの準備はすでに整っている」

「あっちも準備OKみたいよ」

「戦闘……開始……」

「私たちセハガールの力、見せてあげます」

「おっと、私も居ることを忘れてないかしら」

「行きますよ、ファミ通さん」

「ええ。今こそ、ゲーム記者の底力を見せる時だね」

「強そうなモンスターがいっぱいアル。腕が鳴るアル」

「みんな、慎重に行動しゆべ……しゆべきだ」

「ノワール様の分まで戦いましょう」

「伝説的な強さを持つ僕にかかれば、こんなモンスターたちなんて敵じゃないよ」

「アプソリユート・ゼロに封印されし我が力を解き放つ時が来たようだな」

「みなさくん、頑張りましょうね」

「すごい、モンスターがたくさん。よし、狩って狩って狩りまくるよ」

「皆さんファイトです。私、離れた所から精一杯応援するので、頑張りてください！」

「だめよ、貴方も戦いなさい」

「なーに心配ないさ。ピンチの時は私が守ってあげるよ」

「私と愛さんの歌でこの世界を救いましょう」

「新たに開発したメカの試運転に、丁度いいであります」

「全て食べてしまつて構わないんですのねえ」

「僕の必殺シユートで蹴散らしてやる」

「私のこの思い……届いて」

「ゾンビの相手は私に任せて」

「妾に勝てるモンスターなどおるはずがない」

「治療は任せてください」

「君たち、私の完璧な戦略に従うんだぞ」

「はは、こいつはいい。斬って斬って斬りまくってやる」

「さあ、いきましよう、姫！」

「私とキリアのコンビネーションは無敵にや」

「この世界では……私の世界のような悲劇は……絶対に繰り返させません！」

さらに次元を超えて集結するねぶねぶ。

「私は女神にはなれないけど……私のネプテューンブレイクはゲームバランスをぶつ壊す必殺技だよ」

「同時攻撃で一気に決めるよ！」

「ヴィクトリー」「ネプU」「デルタ」「ねぶ」

「」「スラッシュ!!!」「」

「久しぶりにアレ……やりますか！ みんな……ちよつとくすぐりたいよ」

「FINAL HARD FORM」ネプテューヌ・ハード・フォーム

「ついでに私も……ハード・ネプテユーン」

「みんな行くよ、総攻撃!!」

劇場版ネプテユーン

ゲームギョウ界の危機、デルフィナス襲来!!

次元を超える仲間たち。

「たとえ……たとえこの先、君たちが私の作品に出なかつたとしても……君たちと大冒険をしたことは絶対に忘れないよ。日本一、がすと、初代コンパちゃん」

近日投稿開始!?

「そんじゃあ、最後にあれ、言つときますか！　せーの！」

「「「主人公ですから、ドヤアー!!!」」」

「えっと……みんな何をしてるのかな？」

「ちよつと、何言ってるのさ初代の私！　私と言ったら主人公アピールでしょう！」

続かない。

劇場版ネプテューヌ予告2

いくつもの次元移動の果てに、破壊者となる決心がついたネプテューヌ。

「女神、メーカーキアラ、武将、ゴールドサード、教祖、セハガール……全てを破壊する」
かつての仲間との戦い。その先に待つものとは……

「ネプ子……どうして……」

「これでお別れよ、あいちゃん。ネプテューンブレイク」

「これでもう後戻りはできない……私は全てを破壊して……全次元を救う……」
今、ネプテューヌの悲しき戦いが始まる。

「ネプテューヌさん……貴方にとって私たちは仲間ではなかったのですか」

「どうして……メガドラちゃんやムギちゃんを……」

「私は全てを破壊する。当然貴方もよ、ドリームキャスト」

「……仕方ありません、力づくで止めさせて貰います。ドリーム・スラッシュー！」

「無駄よ！ ……覚醒」

「そんな、私のドリーム・スラッシュを躲しながら接近してきてる」

「さようならドリキヤス。サイレント・ブレード……これでセハガールは全て倒した」

「よくも、ドリームキャストを！ 剣魔法 ソーサリアン」

「無駄よ！ ドリーム・スラッシュ！」

「なっ、どうしてドリームキャストの技を」

「今の私は倒したキャラの技を使うことができるのよ」

「当然魔法も……ライトニングボルト！」

「フォトン・ブレード。くっ、まともに戦っては勝てない。ここは強化を……麒麟香」

「悪くない選択よ。強化式忍法。古の粉薬。入魂」

「強化が間に合わない!？」

「貴方はあえてこの技で倒してあげる。さよならファルコム、ソルブレイカー」

「これで全メーカーキャラを倒した」

「行きますよ！ X・M・B！」

「無駄よ、バインドカッター」

「今よ、ネプギア！」

「うん！ 音速剣フォーミュラーエッジ！」

「ソウルズコンビネーション！ ……やるわね、中々いいコンビネーションよ」

「でも、私には遠く及ばない」

「まだまだ、ミラージユ・ダンス！」

「何度やっても同じよ、無双乱絶刃」

「貰いました、X・M・Bエンプレス！」

「ネプギアと競り合ってる今のネプテューヌさんには、この攻撃は防ぎようがないですよー！」

「それはどうかしら、目からビーム！」

「そんな!？」

「ユニちゃん！」

「戦闘中に余所見なんてしちやダメよ、FINAL HARD FORM！」

「しまっ！」

「さよならユニちゃん。いくわよ、ネプギア。M・P・B・L！」

「そんな……私が……ユニちゃんを……」

「悲しむ必要はないわよ。貴方もすぐに同じところへ行くのだから。ステイングソード・ジ・ハード！」

「これで女神候補生は全滅……あと少し……」

「よくもユニを！ インフィニット・スラッシュユ！」

「無駄よ、ゲート・キーパー！」

「くっ、ケイの技を！」

「お気に召さない。それならこれはどうかしら！ ブレイブカノン！」

「トルネード・ソード！ この、どこまで私をバカにすれば気がすむの！」

「次はケーシヤの技がいい。それともゴットイーターちゃんかしら？」

「許さない……絶対に!! トルネード・チエイン！」

「狩人の知恵」

「攻撃が……効いてない……」

「冷静さを欠いた時点で貴方の負けよ。さよならノワール。伝説の一撃」

「あと2人でやっと終わる。泣いたり悲しむのはそれから」

「行きますわよ。プープルアセンスバースト」

「無駄よ。ファイティンググヴァイパーII」

「くつ、プルルートの技を。……あの子ですら破れてしまいましたの」

「まだまだ、行くわよ。THE・海男☆天国！」

「キネストラダンス。うずめまで」

「なかなか粘るわね。それでこそ倒し甲斐があるわ」

「私は絶対に負けるわけには行きませんのよ！ いきますわよ、スパイラル・ブレイク
！」

「私には勝てない！ ネプニカルコンビネーション！」

「くう！ わたくしが競り負けるなんて！」

「これで終わりよ、さよならベール。氷剣 アイスカリバー！」

「後1人……やっと終わるのね」

「いよいよ残った女神は貴方だけよ……ブラン」

「らしいな。……シエアエネルギー解放。……いくぜ。……次世代の女神の力を見せて

やるよ」

「ネクストフォームだかなんだか知らないけど。私は既に次世代なんて概念は超越して
るわよ」

「抜かせ、ツェアシユテールング！」

「貴方は私の技で倒してあげる、クリティカル・エッジ！」

「さあ決着の時よブラン！ 行くわよ！ ハード・ネプテューヌ！」

「勝つのは私だネプテューヌ！ 吹き飛びやがれ！ プラスターコントローラ!!」

次元の破壊者ネプテューヌ THE FINAL

近日投稿開始！

「カット。……いいわ。みんな、素晴らしい演技。文句なしよ」

「いやー、まさかこの四女神オンラインで撮影をすることになるなんて、想像してなかつたよ」

「その通りですわね。ゲームの中とはいえ、まさか私たちの技全てを完全に再現できる

とは思っていませんでしてよ」

「おまけに女神の姿やネクストフォームの姿まで完全再現ですからね。尊敬します」

「GMさんもメインちゃんもグツジョブだよ」

「いえいえ、全て皆さんの協力のおかげです」

「技の完全再現はやり甲斐があつて、滅茶苦茶面白かつたし」

「ちよつと、私一方的にやられているだけじゃない！ 貴方達と扱い違いすぎじゃない
！」

「ネプギアと一緒に戦えたのは良かったですけど、もう少し善戦をしたかったです」

「ノワールさんやユニさんたちはまだいい方ですよ。私やアイエフさんなんて瞬殺です

よ」

「おいおい、ドリキヤス！ そんなこと言ったら俺なんて出番もなく「あいつ死んだんだ」って会話の中で名前だけ出て来て終わりだぞ！」

「そーだそーだ！ こんな扱いはおかしいぞ〜！」

「お前らはまだいいほうにゆ。私なんて技だけで終わりにゆ」

「そーだよ！ 僕も映画に出て伝説的な活躍がしたかったよ！」

「はいはい。私もお姉ちゃんみたいに戦いたかったー！」

「私はラムちゃんみたいに、技だけでもいいから出して欲しかった。(しょんぼり)」

「私は名前も技も出なかったです。そしてこの作品では大して出番がないです」

「わたしもえいがでたかった！ ねぶてぬたおしたい！」

「ちよつと！ 私たちゴールドサアドが影も形もないよ！ ゴールドサアドも破壊するとか最初の方で言ってたじゃん！」

「ああ、めつちやカオスになつちやつた！」

「素晴らしい出来ね。やっぱり名監督兼名役者の私が制作してるだけあるわね」

劇場版ネプテューヌ 予告3

様々な次元を旅したプラネテューヌの女神ネプテューヌ。

その中には途中まで同じ道を辿り、対象的な結末を迎えた2つの世界が存在した

一方は闘争の果てに幸福を得た世界、聖剣エンド

もう一方は闘争の果てに多くを失った世界、魔剣エンド

決して交わる事のない2つの世界……その世界が合間見える時……

「どうして……貴方は何も失わずこんなに幸せを手に入れているんですか!」

「私は……私は大切な人たちを失ったのに」

「みんなを犠牲にした私達が間違っていたとも言えるの!」

「そんなの……認めない!絶対に!認める訳にはいかないんです!!」

「壊してあげますよ、貴方の大切な人もこの世界も全て!!」

全次元を揺るがす災いが降りかかる！

「私は認めない。貴方も、その剣も…この世界の全てを！」

「やめて下さい！貴方とは戦いたくありません！」

「だったら…だったら私にやられて下さい！ラジカル・セイバー！」

「!?…仕方ありません、この世界を守る為に貴方を倒します！ラジカル・セイバー！」

「秘剣・リンドバーグ!!」

「ミラーージュ・ダンス!!」

「パンツァー・ブレイド!!」

「押されてる…私が」

「お姉ちゃん達を犠牲にして手に入れたこの剣より…貴方のその剣の方が上だとも言うのですか」

「もう辞めましょう。こんな戦いに何の意味もありません」

「貴方の世界のお姉ちゃんやユニちゃん達も、こんな事は絶対に望んでません！」
「うるさい、うるさい、うるさい！」

「認めません！貴方の方が強いなんてことは絶対に！変身！」

「あなたの気持ちは理解できません」

「でも、あなたに私の世界を滅ぼされるわけにはいかないんです！」

「私も本気で行きます！刮目してください！」

「貴方だけは絶対に認めない！M・P・B・L！」

「あなたのような存在はこのゲームギョウ界には要らないんです！M・P・B・L！」

「全て計画通り」

「2人の女神が戦い消耗しきった時こそ、私が全てを頂く」

「そうなれば……全ての世界が私のものとなる」

「ちよーつと待ったー！主人公補正！からの、ヴィクトリー・スラッシュュ！」

「痛たたた。さすがにこの技でエグゼドライブを受けるのは無理があったかな」

「お姉ちゃんー！」

「どうしてここに！この世界のお姉ちゃんは神次元にいる筈」

「私はこの次元とは違う別次元のお姉ちゃんだからだよ」

「そして、どうして私がここにいるのかは、いーすんに頼まれてたからだよ」

「こんな無意味な戦いは止めてつて。どっちの世界のいーすんからもね」

「勿論、頼まれなくても可愛い妹達の戦いなんてとめるけどね」

「もう遅いよ。この世界の事を知っちゃったから」

「後には引けないの。負ける訳には行かないの……皆んなの犠牲を否定する訳には行かないのー！」

「邪魔をするのなら恩人のお姉ちゃんでも、容赦はしない！」

「やっぱり倒すしかないみたいですネ」

「もう2人とも、私の話聞いてた。お姉ちゃんは止めるつて言ったよね」

「聞き分けの悪い子達にはお灸を据えないとね」

「いくよ…刮目せよ！」

戦いの果てに待つものとは一体？

「もう終わりだ。貴様らは愚かな争いの結果、女神化することが出来ない」

「愚かな争いですつて」

「全て貴方が仕組んだ事でしょ」

「何とでも言え。女神化出来ない貴様らなど私の敵ではない」

「それはどうか」

「女神化出来なくても、私と2人のネプギアが力を合わせれば……どんな敵だって絶対に倒せるんだよ」

「私たちが」

「力を合わせる」

「…うん…」

「世迷言を」

「世迷言かどうかは直ぐに分かるよ」

「行くよネプギア！FINAL HARD FORM」ネプギア ・ハード・フォーム

×2

「二刀流はあんまり得意じゃ無いけど。大っきい私直伝の必殺技を見せてあげる」

「うおー、ネプニカル・コンビネーション（銃撃無しバージョン）」

劇場版ネプテューヌ

シエアブレイドVSゲハバーンVS木刀

「ねぶ!?!私の武器、木刀なの!」

「いやいや、無理ゲーだって。初期武器の木刀で最強武器に勝てる訳ないじゃん!」

「せめて、レーヴァテインとか龍刀・桐生とかを頂戴よ!」

「死んじやう!こんな死んじやうってば!」

近日投稿!

ネプ子さんが裏話次元にログインしました。

「ヤッホー。この作品の主人公。パープルハートことネプテューヌだよ」

「目が覚めたらって、今回は違うでしょ！」

「タイトルで分かると思うけど、今回はこの作品の裏話とか感想を私や今まで登場したキャラ達で説明していくからね」

「それじゃあ前置きはこのぐらいいにして早速始めちゃうよ！」

「まずこの作品のタイトルの由来だけど、それは至ってシンプル」

「四女神オンラインをプレイした人なら分かると思うんだけど、四女神オンラインの始めの方で私が言った「ネプ子さんがログインしました」がかなり印象に残っていたから、そのまま使ったんだって」

「後、私の予想だけど私の名言の一つである「ネプ子さんがログアウトしました」を逆の意味にしたのもじゃあないかな」

「まあ、ぶっちゃけて言うなら……タイトルは適当に考えましたっていうのが一番しつ

くりくるかな」

「さらに、実はこの作品には作者が投稿する時点で決めていた隠し設定みたいなものがあるんだよ」

「例を挙げるなら、私以外のキャラが主人公をやっている作品の話では、その作品の主人公よりその次元の私の方が私と絡むようにしてみたいだよ」

「後、作者が一番好きなメーカーキャラのあいちゃんの名前を、どの作品でも必ず1回は出してるんだよ」

「嘘だと思ったその君！この作品を読んだ後、直ぐにでも過去の作品全てを見返してみるのを推奨するよ」

「…いつまでも私が説明するのも面倒だし、お次はせがみん、あいちゃん、セハガールの皆さん、バイクの私…ヨロシク」

「ちよ、いきなり振ってこないでよ…もう、仕方ないな。ここからは私たちが説明していくから」

「えーと1番最初に飛ばされた次元が夢の合体スペシャルにした理由は、最初にバイク

姿の自分に合う事で、その後どんなことが起きてもすんなりと受け入れるようになるだろうと思ったことみたいだね」

「加えてネプ子がバイクのネプ子と組んで私やセガミをからかっているシーンを書きたかったから…って何よこの理由！」

「何、まだあるの。何々…さらに単純にあいちゃんが好きだったことなどがあげられます…ってなんてこと説明させるのよ。しかも、本人によ！」

「さて、次に各次元を周る順番だが…これは投稿する前からある程度は決めていたようだ」

「作者はこの作品を書くときに、キャラはそのキャラが始めて出た作品（ゲーム記者の2人は別）で出したいと思ってたみたい」

「だから順番はネプU↓激ブラ↓四女神オンラインの順番で書く事は決めてた」

「それに加えて、激ノワで出てきたアイドルの武将のお2人をPPで名前だけでも出したかったらしく、激ノワの後にPPを書く事を決めていたみたいですよ」

「でも実際は深夜テンションで投稿した作品だから、細かい設定はほぼ後付け！」

「まあここだけの話。投稿した後結構修正してるんだよね。最初から読んでいる人なら分かっているとと思うけど」

「さて、次からはそれぞれの作品のことを語っちゃうよ。そんじゃあ、うずめ。次ヨロシクー！」

「お、俺かよ。作品内で出番はなかったんだがな」

「あーしかたねえ、いっちょやるか」

「えー、まず、1話目のネプ子さんが夢の合体スペシャル次元にログインしましたは……いつは作者としてはなかなか上手く書けたと思ってるみたいだぜ」

「なろうネタ。アイエフっち、セガミっち弄り。ねぶっちとバイクのねぶっちとの絡み。そんでもって、セハガールの4人を出さない事でちよーどいい感じにまとまった文字数とか、ちよー良かったと思ってるポイントみたいだよー」

「ただ、うずめ的には……うずめにも出番があったら良かったなーなんて思ってるんだよねー」

「はっ！……コホン。えー、ただ失敗したと思ってる部分もあるみたいだな」

「タイトルが長すぎる事、最後に続かないと入れてしまった事とからしい」

「まあ、続かないと書きつつ。次の話では前の世界で起こったことをがつつりと説明し

ちまつてるからな」

「タイトルに関して、ねぷ子さんがセハガ次元にログインしましたとかでよかったよな」

「まあ、深夜テンションで投稿した作品だから、そこんところは大目に見てくれ」

「まあ大体こんくらいかな。：ほんじゃあ、次はデンゲキっちとファミっち、ヨロシク」

「私たちの出番ですね！では僭越ながら私、デンゲキコから始めますよ」

「さて2話目のネプ子さんがネプU次元にログインしましたが、これは正直ネプUの脱衣するのをネタとして入れればよかったと思っっているみたいです」

「最近是有名な某ゲーム機の規制が厳しいらしいですからね。それに今まではネプテューヌさんたちが戦闘中に脱衣することもありませんでしたし」

「まあ、番外編ではそのことについて触れて居りましたが」

「本編でネタとして入れておけば良かったのかもしれないね」

「それ以外は概ね書きたいことを書けたそうです」

「特にブランちゃんのネタは作者さんのお気に入りなので、その後の話でももうしつこ

いくらい入れてましたからね」

「そしてしれっと作者さんのお気に入りのステマックスと海男の名前を出せただけでも良かったと思っっているみたいですね」

「さてと、ではそろそろファミ通さんに交代を…やや、これは失敬。もう感想は全て私が話してしまいました」

「いやー、私としたことが。まさかこんなミスをしてしまうとは。すみませんね、ファミ通さん」

「絶対にワザとだよね。…あとで覚えててくさいよ」

「さて…それじゃあ、次はノワールさん、ネプテューヌさん、秘書官さん、よろしくお願ひするよ」

「さあいよいよ、私の出番ね」

「3話目となるね。ぷ子さんが激ノワ次元にログインしましたは、まずノワールをぞんざいに扱って良かったのかなと思っただけだね」

「一応、主人公でしたし。…って一応でなによ！人気投票で選ばれた私が正真正銘、主人

公よー！」

「それに自覚してたのならもつとちゃんとした出番を与えなさいよ！なんで途中で私をフェードアウトさせたのよー！」

「お、落ち着いてノワール！きつと作者がノワールを弄ることが好きだったからだよ」

「納得いかないわ！私ただ、ボツチだつてバカにされただけじゃない！」

「そ、そんなことはないですよ」

「だいたい貴方も貴方よ！ちやつかり私より出番が多かつたじゃない！」

「ノワール、落ち着いて。……秘書官君、ノワールの相手は私がやるから。後の説明お願い」

「し、仕方ありませんね、ここからは僕が。また、武将を誰か1人だけでも出した方が良かったんじゃないかなと思っっているようです。まあ、もし出すとしたら私の気に入っているエステルかモルーだったみたいです」

「さらにこの作品以降、後書きが長くなってしまつて申し訳ありませんでした」

「作者さんのネプテューヌ作品への愛が止まらなくなつてしまつたそうです」

「それ以外は書きたいことを書けたとようです。特にケイさんとケーシャさんがいたら僕は無事ですすまなかつたとプレイした時に思ったようで、それを書けたのが良かったみたいです」

「では次はネプギア様、ユニ様、ロム様、ラム様よろしく願います」

「分かりました。では、私ネプギアから始めさせていただきます」

「ネプ子さんがPPにログインしましたは…始めは私たち女神候補生を出す予定はなかったらしく、急遽変更したので上手くまとめきれないのではないかと思っているようです」

「最初はプロデューサーさんかヒールちゃんを出すつもりだったみたいです」

「また、お姉ちゃんが歌う歌の歌詞をそのまま使っていたので、感想欄の指摘がなければ今頃この作品がどうなっていたのか…想像したくないです」

「次からは私の番よ！作者が良かったと思っている点は、マジエコンヌ四天王や七賢人、ネズミや下っ端がアイドルやマネージャーになってることについて触れる事が出来たことみたいね」

「ああ、そんな！まだ、説明したかったのに」

「ネプギアばかりにいい思いはさせないわ！また、バックダンサーで踊るアイエフの

可愛さを書くことができた事もみたいね」

「ここだけの話、ネプテューヌ作品をやり始めた中高時代の作者はアイエフよりコンパの方が好きなキャラだったけど、成長した今ではアイエフの方が好きなキャラになってるらしいわ」

「そうよ！胸が大きい女性より、スレンダーな女性の方が魅力的よね」

「ユニちゃん話が脱線してるよ」

「はいはい！それじゃあ、ここからは私ラムちゃんと！」

「私、ロムがやるよ」

「作者的にはネプテューヌちゃんの自画自賛とかノワールさんをいじれて良かったって思ってた」

「あいーんちゃんやツネミちゃん、5pbちゃんの名前だけでも出せて良かったと思ってるみたいだよ」

「でもね、でもね。作者的にはアイドルネタを入れた方が良かったかと思ってるみたいだよ」

「猫ちゃんのファン辞めますとかティンと来たとかかな？（はてな）」

「えーと、だいたいこれくらいかな」

「次はお姉ちゃん。ネプテューヌさん。タムソフトちゃんよろしくね。（ファイト！）」

「次は激ブラの感想!……といきたいところなんだけど、文字数の都合で一旦ここで終わりにするよ」

「実は作者が決めている隠し設定の1つに、手軽に読めるように4000文字以内で作品を書くようにしているんだって」

「因みに前書きと後書きはノーカンらしいよ」

「PP?……4人もキャラ出したんだし仕方ないよ。うん」

「ということで!そろそろ文字数が4000超えちゃいそうから、ここでお終い!異論も何も認めないよ!」

「激ブラの感想はまた今度ってことで!じゃあね」